



求道



第七號

第二卷

明治三十一年十二月廿六日 第三種郵便物認了
明治三十一年八月一日發行(每月一回發行)

求道第貳卷第七號目次

求道

◎信樂開發論

◎虚飾偽善

講話

◎心蓮開發

◎信仰は廣大勝解也

實驗

◎無我の實驗

▲信仰書翰二章

雜錄

◎喇嘛僧雜談

歎咏

◎小園秋來

◎歸省雜詠

◎悼亡弟

時報

◎遊行日記

▲消息

近角常觀

左千夫
一八風也

每日曜午前八時

求道學舍

(本郡森川町一番地)

每土曜午後二時

第一一求道會

(九段坂佛教俱樂部)

最終土曜午後七時

第三三求道會

(濱町日本橋俱樂部)

講話 (始開月九)

求道

第貳卷 第七號

信樂開發論

一點東方白くして天下忽ち明らかなり、吾人罪惡の胸中一點大慈の光明を感せば忽爾として信樂開發の時來る。「信卷」に曰く、信樂に一念あり、一念とは斯れ信樂開發の時刻の極促を顯し、廣大難思の慶心を彰すと、實に是れ躍如として信心歡喜乃至一念の真相を見つべきに非ずや。稱して信樂開發の時刻の極促といふ、從來苦惱を以て鎖され、疑惑を以て蔽はれたる、恰も井を穿ちて水出でず、花閉ぢて開かざるが如き者、忽ち無限の慈悲に感泣し、不思議の佛智を鑽仰するの一念萌すの時、歡喜愛樂の情沸々湧き來りて止むべからず。古の所謂「若し人善根を種へて疑へば花開かず、信心清淨なれば花開て佛を見奉る」といふもの、眞個に實驗の形容にあらずや。疑は是れ自己の力を恃みて未だ佛智不思議を信ぜざるの謂にして、信心清淨は、不可思議の靈光、胸底に閃き來りて全心透徹するの謂に非ずや。此に於てや彼の名號不思議誓願不思議の佛力は一瞬一時に既に我心内の事實として一點疑なきのみならず、踊躍歡喜自ら其理由を説明する能はざるの境界也。

觀無量壽經及び涅槃經にあらはるゝ王舍城中の悲劇は實に絶對他力の實驗の舞臺にあらずや。獄中の韋提希、廓然として大悟し、無生法忍を得、五百の侍女と共に大菩提心を起し來るものは信樂開發の一念にあらずや。身心惱亂の阿闍世王、一朝佛陀の慰藉を蒙り、頓に信樂開發し來るや、彼自ら驚き、奇異の念に堪へず叫びて曰く、世尊我世間を見るに伊蘭子より伊蘭樹を生ず、伊蘭子より梅檀樹を生ずる者を見ず、我今始めて伊蘭子より梅檀樹を生ずるを見る、伊蘭子とは我身是也、梅檀樹とは我心無根信也、無根とは我初め如來を恭敬することを知らず、法僧を信せず、是を無根と名くと。眞個に是れ、衆生貪瞋煩惱の

中に忽然として清淨金剛の信を生ずるもの、高原の陸地には蓮華を生ぜず、卑濕の淤泥には乃ち蓮華を生ず。信心開發の歡喜豈文字を以て描くべけんや。能く一念喜愛の心を發すれば煩惱を斷ぜずして涅槃を得、凡聖逆誘齊しく回入すれば、衆水の海に入りて一味なるが如し。とは頓教一乘海の實驗的眞味に非ずや。

吾人は茲に仔細に古今の信仰問題につきて其心的状態を検せむかな、若し吾人常に佛陀を叫び、慈父を呼ぶと雖單に佛陀を假定想像して、以て安心の腑たらしむるに止らしめば必ずや煩惱の波濤の爲めに掀翻し去られて終に其跡を止めざらむとす、是假定想像の佛陀に過ぎざれば也。若し吾人常に佛陀を理想として以て自己行爲の標準と爲むか、日夜奮勵して頭燃を拂ふが如くするも、一點の邪念忽ち平生の修養を破壊し去りて人をして終に失望の淵に墜さしむるに至らむ、是假定理想の佛陀に過ぎざれば也。前者は是れ觀念所現の佛陀にして後者は實行票準の佛陀也。而して恰も是れ觀經示す所の定善と散善にして、古今信仰の問題に心を傾くるもの必ずや其何れかに屬せざるもの殆んど稀なり。現時青年の信仰状態を察するに心に自己の行爲の不完全なるを悲み、理想の遠くして益々達すべからざるを憂ふるものに非ざれば、既に自家心内に普汎的若くば相好的に佛陀を想像作爲して以て自ら得たりとするもの滔々皆是也。嘗に現代の青年のみならず、古來戒を以て進まむとするものは日夜苦勵して三業清淨ならざるを憂ふるの人にして、禪を以て達せむとするものは明鏡の長へに拂拭し難きを憂ふるに非ざれば明鏡を假想して直ちに自ら得たりとし、以て空見に陥らざるもの稀也。蓋し戒定慧の三學は佛弟子道を求むるの方法にして、三者欠くべからざるもの、而も眞個に絶對の見地を開くに至れば何れも一にして他を兼ねるものなりと雖、戒定の二者遂に相對自力を脱し難きを奈何せむ。固より大乘戒の極致、佛心宗の骨髓、必ずや絶對無礙の境界たるべしと雖、其門に入るや必ず息慮凝心と廢惡止善たらずむばならず、遂に是れ定善散善の二者に外ならず、此に於てや釋尊八萬四千の法門を卷き來りて之を觀經の定散二善に攝し來る。是れ教相教理の問題に非ずして古今人心を貫ける信仰の活問題也。而して想像の佛陀及び理想の佛陀は遂に何の所に至りて如何なる結果を運び來るかを究めざるべからず。

想像の佛陀は吾人の心に隨うて變化極りなし、吾人佛陀是の如しと觀するときは佛陀觀するが如く現ず、吾人佛陀前に在すが如しと觀するときは佛陀前に在すが如し、然れども若し苦痛來るときは佛陀亦現前せざるを奈何せむ。理想の佛陀は亦吾人追ふに従うて益々遠く、理想益々清淨にして吾人益々不淨なるを奈何せむ。恰も是れ心弦を緊張して一點餘裕なき心的状態に非ずや。眞面目は乃ち眞面目なりと雖、毫も安心歡喜の境に達せず、此の如く、想像の佛陀、理想の佛陀は遂に最後の樂境を開き來る能はず、信卷「載する所の至誠心釋は實に此難關を開き來る秘鑰たらずむばならず也。親鸞聖人二十年間叡山に在り、心水を凝すと雖識浪頻りに動き持戒精進なりと雖内心忽ち虚假に陥る。自ら靜にし、自ら清らし、自ら眞實ならむとして遂に爲すべからざるを悟了し來る。聖人遂に斷々乎として宣はく、「外に賢善精進の相を現するを得ざれば内に虚假を懷けば也」と。蓋し是れ聖人が衆生の本性を説破し盡したる者、自力我慢の根柢を破壊して、一寸だも其餘地を剩さざる也。聖人當時三業を清淨にし、祈求厭離の眞實を勵行せむと企て玉へり。然れども一切時中貪愛の心常に能く善心を汚し、瞋憎の心常に能く法財を燒く。其實験を告白して曰く、「貪瞋邪偽奸詐百端にして惡性侵め難し、事蛇蝎に同じ、三業を起すと雖、名つけて雜毒の善と爲す、亦名つけて虚假の行と名く、眞實の業と名つけざる也。若し此の如き安心起行を爲す者は縱使ひ身心を苦勵して日夜十二時に急に走め、急に作して、頭燃を拂ふが如くする者、衆へて雜毒の善と名く、此雜毒の行を廻して彼佛の淨土に生ぜむことを求めむと欲する者、此必ず不可也」と。此に至りて吾人の三業毫髪も自力の功力を存せず、唯自から頭上に輝き來るは絶對他力の清淨眞實ある耳。是即ち阿彌陀佛因中に菩薩の行を修し給ひし時、一念一刹那も三業の修し給ふ所、眞實ならざるなく、清淨ならざることなかりしに淵源する者、吾人は全然此佛陀の眞實を須ゆ可き也。是即ち親鸞聖人の眼中に映し來る至誠心の眞意義にして彼假理想の虚飾偽善の眞實を破壊して最後に自然法爾として吾人心中に開發し給ふ絶對の眞實也。

吾人は猶進みて如何にして吾人心中に此佛陀眞實の開發し給ふかを述べむかな、曰く是唯一點佛陀の大悲眞實に對して疑なきの心也。佛智の不思議に對して疑ふ可からざるの心也。此心果して何れより來る、從來嘗て味はざりし絶對大悲の佛陀は照々として疑はむとするも疑ふ能はず。既に一點此念萌しぬれば見る、世界に遍滿して吾人を蔽ひ、事々物々其恩徳の外に出づることなかりき。嗚呼吾人は恰も水中に在りて渴を叫びし者、否、生來空氣を呼吸して之を自覺せざりしが如くありし。首

を回らせば、慈悲深遠にして虚空の如く、智慧圓滿にして巨海の如し。吾人何等の幸か此の如きの慈光を蒙る。此一念大慈大智の眞實を認むるの時、言ふべからざる歡喜身心に溢れ來りて悦豫其極に達するもの即信樂開發の一大實験に非ずや。此の如き大實験は毫も自己の力より來るに非ず、全く如來回向の賜ならずむばならず、故に稱して欲生といふ。此の如く聖人三信連續一貫して唯純粹他力を以て解し給ふもの、皆此信樂開發の實験の味たらずむばあらず也。

吾人以爲らく三信字訓釋の如き、一字一字皆信仰の實感を證明したるものにして、結局疑蓋無雜の一信樂の味に攝め來りたるもの。蓋し信樂の文字其味深くして其價洵に貴し、所謂淨信愛樂の謂、信仰内面の眞味を示し盡して亦餘蘊なし。佛陀吾人を信じて清淨一點の疑を存し給はず、此に於てや吾人疑心の行者亦遂に佛陀を信ぜざるべからず。又佛陀吾人を慈愛して恩徳到らざる所なし。此に於てや吾人罪惡の輩亦知らず識らず佛陀を欲願愛悅し奉るに至る。親鸞聖人一代教を此二文字に攝め來りて其實験を唱道す。聖人「信卷」を編み給ふや劈頭筆を採りて曰く、夫以みれば、信樂を獲信することは如來選擇の願心より發起し、眞信を開闢することは大聖矜哀の善巧より顯彰せり。然るに末代の道俗近世の宗師自性唯心に沈みて淨土の眞證を貶しめ、定散の自力に迷て金剛の眞信に昏しと。是實に聖人の眞面目にして眞宗の骨髓也。蓋し當時禪風漸く起りて自性唯心を唱ふるものあるも未だ淨土慈悲の味を悟らず。西山鎮西猶定散苦勵の自修を事として遂に絕對他力の確信に達せず、幸に愚禿獨り此信樂の開發の恩徳を蒙ること偏へに二尊の賜たらずむばあらず。而して是愚禿のみ賜はるものにあらず。一切衆生智識と階次との如何を問はず皆之を賜はり之を味ひ得べきもの、一切衆生悉有佛性とは、一切の衆生遂に此大信心を得べしとの謂たらずむばあらず。而して是如來の加被力より來り、大悲廣慧の力に由るが故に總て吾人人爲を以て開悟發起する言語を以て形容すべからざる也。故に曰く、凡そ大信海を按ずれば貴賤縑素を簡はず、男女老少を謂はず、造罪の多少を問はず。修行の久近を論ぜず。行に非ず、善に非ず。頓に非ず、漸に非ず。定に非ず、散に非ず。正觀に非ず、邪觀に非ず。有念に非ず、無念に非ず。尋常に非ず、臨終に非ず。多念に非ず、一念に非ず。唯是れ不可思議、不可稱、不可說の信樂也。喩へば阿伽陀藥の能く一切の毒を滅するが如く、如來の誓願の藥は能く智愚の毒を滅する也」と。終に之を稱して横超の金剛心と極言するに至る。

横超の文字は眞個に信樂開發の絕對圓頓の實験を顯はせるもの、其味深うして言ふべからず。彼即心即佛即身是佛の宗旨頓は乃ち頓なるも吾人罪惡の衆生開悟し難きを如何せむ、唯心是佛性なりと觀するも吾人煩惱具足の凡夫を免るあたはず、現世是淨土なりと揚言するも遂に火宅無常なるを奈何せむ。吾人は如何にするも穢土の外に淨土を祈求せざるべからず、罪惡已外に慈悲の救済を仰がざるべからず。然れども、彼佛陀を想像して自ら心を慰め己を樂ましむる定善に非ず、佛陀を理想として苦闘激勵して光明に近かづかんとする散善にも非ず、此の如きは部分的に其光を認め、漸次的に其功を積み、階級的に其行を異にし、品位的に其悟を別にする者、然るに今や絕對不可思議の慈光は頓に吾人を照して之に觸るとき忽ち身心柔軟にして其歡喜受樂言ふべからず洵に是れ横に五趣八難を超越する者、此に至りて一點の疑なく、毫厘も苦惱なし、是人より聞けるが爲めに信ずるにあらず、心中自明にして信ぜざるべからざる也、單に自己心中の道を信ずるに非ず、満足大悲の佛陀を信ずる也。且つ之を説くや冷暖自知之を味ひて之を説く、他と議論せんが爲めにあらず、名譽の爲にもあらず、利益の爲にもあらず、唯佛陀の大悲疑ふべからざるか爲に信ぜざるべからざる也、涅槃經に言へる聞具足、信具足の境界たらずんばあるべからざる也。

此の如き横超他力の信樂は毫も人間の力を認むることなし、寧ろ人間の力極まりて最後に開發し來る所、故に一たび此絕對に入るときは善人其善を認むるなく、惡人其惡を存するなし。蓋し善人自ら以て善となす所以のものは未だ絕對の大慈を認めざれば也、抑々吾人人世に於て晝夜身を犠牲にして人の爲に盡すと雖如何程の事かあらむ、たとひ全身を擲つも一人也、たとひ一生を投ずるも五十年也、何ぞ自ら稱して我善を爲せりと誇るを得む。夫未だ絕對の慈光を認めざるものは猶自己の善を認むるもの也、自己の善を認むるものは遂に憍慢の徒たることを免る能はざる也、經に曰く、憍慢と蔽と憍怠のものは以て此法を信じ難しと、嗚呼自力の善を以て少善根福德因縁なりと誠め給ふもの、決して良なきに非る也。故に罪福を信じ善本を修するが如き、善は則ち善なるも遂に絕對不可思議の大善大功徳を認むる能はざるもの、他を非とし自を是とし、惡を惡み、善を善みするの境界にして之を他の絕對の大慈、惡を救ひ苦を濟はんとし給へる境界より見たまは、畢竟未だ胎宮の小世界に彷徨せるもの、未だ絕對の大を認めざるものなるか故に疑城と云ひ、自己の善を認むるものなるか故に憍慢界と云ひ、未だ佛智の

不可思議を信ぜざるが故に舍華未出と云ふ、所謂善根を植へて疑へば華開かずといふもの也。此の如きの人、最後に自己の無能を認め、無功德を感じ來りて、過去の半生を顧みるに何等の意義をも認むる能はず、一點我執の伴へる善根は悉く是れ名利の手段にして、一念名利の觀念を基とせる慈惠は悉く虚飾偽善の行爲たらざるはなし。首を回らして佛陀の不可思議海を仰ぎ來るに深廣にして涯底なし、吾人善を爲すが爲に救濟せらるゝに非ず、罪深きが故に救濟せらるゝなり、惡を誠むるが故に本願あるにあらず、惡を救ふが爲に本願の存するなり、一點佛陀の大慈不思議を認め來ると同時に自力我執の小善根小福德之を捨てざらむとするも能はざる也。聖人誓願不思議を讚するの中に曰く、猶し利劍の如し能く一切憍慢の鎧を斷つが故に、閻浮檀金の如し、一切有爲の善を映奪するが故にといふもの、此實驗的意義たらずんばならず。此に至りて善人の眼中初めて絕對善の大光明を仰ぎて自力我執を翻すの時、歡喜胸に滿ち、渴仰肝に銘じて大願海の中に流入せずんばならず也。

大願海の中には智愚の波こそなかりけれ、既に智者をして其智を認むる能はざらしめ、善人をして其善を感ずる能はざらしむ、亦愚者をして其愚を悲まざらしめ、惡人をして其惡に苦まざらしむること同じからむのみ。大悲の眼中には吾人惡しきが爲に之を捨てたまふことなし、若し惡しきが爲に佛陀救濟の力を疑ふものは亦彼善きが爲に佛陀救濟の力を頼まざるもの、何を撰び、唯信鈔に曰く彌陀如何ばかりの力ましますと知りてか罪業の身なれば救はれ難しとあもふべきと。既に佛陀は絕對の大悲也、何者か相對迷界の衆生其救濟の數に洩るべき、罪業深きものは益々其迷の深きもの、若し之をしも救濟したまはずんば何人か佛陀救濟の目的たるべき、抑々大覺佛陀世に出現し給ふは三界惑溺の凡愚を救はんが爲也、衆生の妄想顛倒の益々甚しき時は是れ佛陀大悲の益々廣大なるを顯はし來るの好機たらずむばならず、阿闍世の救濟の如きは誠に佛智不思議の眞義を顯はし、信樂開發の極端なる實驗たらずんばならず。釋尊阿闍世を慰藉して曰く、王若し罪を得ば諸佛世尊も亦罪を得給ふべし、何を以ての故に、汝が父先王頻婆沙羅、常に諸佛に於て諸の善根を種へたりき、是故に今日王位に居することを得たり、諸佛若し其供養を受けざりしならば王たらざりしならむ、若し王たらざりせば汝國を得むが爲に害すること能はざりし也、若汝にして父を殺して罪あるべくば我等諸佛亦罪あるべし、若し諸佛世尊にして罪を得ること無くば汝獨り如何にして罪を得むと。

嗚呼何ぞ自ら罪を負ひ、惡を慰むるの至れるや、且つ衆生の狂惑の爲に惡を作ると雖罪ありと爲さずといふ、是れ罪を犯すものは相對差別の見地に彷徨して其極端に陥りて此に至れるもの、若し絕對大智の佛陀より之を觀をなせば何ぞ哀むべからざらむ。彼は怒るべからざるに怒れり、喜ぶべからざるに喜べり、彼は望むべからざるを望めり、哀むべからざるを哀めり、害すべからざるを害せり、殺すべからざるを殺せり、其害せりとすふもの、喜べりといふもの、若し佛陀より之を觀をなせば實の殺、實の喜と云ふべきものなし。譬へば山谷の響の聲の如し、愚痴の人は實の聲と謂へり、有智の人は其眞に非るを知れり、殺も亦凡夫は實と謂へり、諸佛世尊は其眞に非ざるを知りたまへり、人の夢中に五欲の樂を受くるが如し、愚痴の人は之を謂ふて實となし、智者は了達して眞に非ざるを知れり、殺も亦此の如し、凡夫は實と謂へり、諸佛世尊は其眞に非ざるを知りたまへり。此に於てや佛陀の人の罪を見給ふ恰も孺子の罪なくして誤りて井中に落つるが如きもの、哀々の情禁するあたはざる也、是佛陀の阿闍世王に説くところ、阿闍世の胸中伊蘭林中梅樹を生し來れるもの決して故なしとせず。聖人「信卷」卷末に於て特に阿闍世王が獲信せる實驗を叙する涅槃經を引用するが爲に數十頁を吞み給はざりしもの、語々句句皆實驗の結晶たれば也。而して是本願醍醐の不可思議を實現せるもの、罪惡の凡愚底下の輩頃に信樂を開發し來る横超他力の事實たらずむばあらず。

此の如く絕對の大願海は善人其善に誇らず惡人其惡を懺悔し來る、本願を信ぜんには他の善も要にあらず、念佛にまざるべき善なきが故に、惡をも恐るべからず彌陀の本願をさまたぐる惡なきが故に、信樂開發の一念に於て煩惱忽ち涅槃となり、凡聖逆誘同一鹹味の大慈悲海中に入る、大願清淨の報土には品位階次を言はず、一念須臾の頃に、速疾に無上正眞道を超證すと云へるもの、眞個に横超他力の極致也。既に此境に入らむか戒律何の力あらむ、禪定何の功あらむ、廓然絕對の大智に接し來りて通ぜざる所なし、故に佛讀して廣大勝解者と云へり。此境に入らむか定善何の力あらむ、散善何の効あらむ、唯絕對大善の念佛ある耳、故に佛讀して念佛する者は人中の分陀利華也と言へり。此境に入らむか、三輩九品の區別なく、大小凡聖の差等なし、此に至りて終に佛教本來の眞面目たる涅槃平等の眞證を實驗せしめ給ふ。此に於てや佛讀して善親友なりといひ、觀音勢至勝友となり、既に彌勒に同じくして三世十方の諸佛同證同體の大悲として證誠護念し給ふ。是信樂開發の一念に如來選擇本願より賜ふ所、嗚呼洪大思議を絶す矣。

虚飾偽善

人間罪惡を自覺すること尙に難し、世人或は罪惡を自覺すること單に我等罪惡ありと斷言するの謂なりとす、甚しきに至りては我等罪惡の子也と斷定して恰も之を許されたるが如き感想を抱くものあり、是れ自覺に非ず、邪見也、既に稱して自覺といふ、是れ自己の罪惡の深きを慚愧する時既に大悲の慈光に入れるもの、寧ろ慈悲の光明を味ひて眞個に自己の罪惡を自覺し改悔懺悔の念に堪へざる也、蓋し猶煩悶苦惱の境にありて罪の子也と絶叫するも猶其根柢を察するに眞個に我罪ありと思ひ切る能はず、故に苦悶する也、外に賢善精進の相を現するを得ざれ、内に虚假を懷けば也との一言は既に大悲の慈懷に攝取せられて自己を思ひ切りたる斷定也、全然自力を抛擲したる態度なり、人間は人間の力にては罪惡を自覺する能はず、人間は虚假也と思ひ切るは既に大悲の力也、人自ら見るあたはず、鏡に對して初めて自己を知り、人自ら提ぐる能はず、他の力によりて足地上を離る、自力の無功を悟了する時は既に佛陀絶對の力を認めたる時也。

濕さるを得んや。

人間は飽迄偽善の結晶也、若し其本性の如くあらしめば、何物をも悉く、自身を善く發表するの具たらしめんとなす、宗教家は自己の信念を告白しながら直ちに探りて以て之を誇らんとするにあらずや、慈善家は慈善を行ふや忽ち之を示さんとするにあらずや、人間は徹頭徹尾虚飾の塊也、罪惡を懺悔するときは其懺悔を以て自己を飾らんとし、人讒侮するときは事實ならざるに之を憚ばず、人激賞すれば其實に過ぐるを知りながら之を迎へんとす、咄、猶人間は偽善にあらずと云ふか、虚飾にあらずといふか、親鸞聖人曰く、是非しらぬ、邪正もわかぬ此身也、小慈小悲もなければ、名利に人師を好むなりと、一語吾人の肺肝を貫く。

吾人は何人の力によりて自己の偽善性、虚飾性なることを氣付きたるか、吾人は人間仲間の忠告によりて之を容るゝ程に寛容なるものなるか、道理理窟の權威の下に服従する程に柔順なるものなるか、唯獨大慈佛陀の御前に立てるの時、自己の偽善虚飾を自覺し來る、信念は是佛陀の心、何の誇るべ

鼻惡の者自己の惡しきを悟らずして平氣に之を行ふものは憐むべき哉、彼猶罪惡を自覺せざれば也、小慈小善を行ひて頗る得々たるものは憐むべき哉、彼猶罪惡を自覺せざれば也、眞面目に自己を修養して常に煩悶に泣くものは眞個に憐むべき哉、彼猶眞個に罪惡を自覺する能はざれば也。

鼻惡の者は自己の惡しきを悟らずと雖、自己も亦口に其罪惡たるを拒まず、たとひ鼻惡たりと雖自覺に達し易し、煩悶の人は常人の視て當然となすところのものも罪として之を清めむと欲す、向上の態度忽ち自覺に達すべし、獨り他を見下して自ら慈善者を以て居るものは容易に自覺に達すべからず、慥慢貢高の善人は遂に信仰の門に入るべからざる也。

罪惡を自覺せざることを、自己を以て善人なりと認むることとは同一の事實の表裏也、虚假の人間其虚假たることを自覺し來りたるは眞實也、虚假の人間自ら善人也眞實也と認むるは是虚飾にあらずや、是偽善にあらずや、親鸞聖人曰く善し惡しの文字も知らぬ人はみな、まことの心なりけるを、善惡の字しりかほは、ねほぞらごとのかたちなりと、豈惡汗脊を

嘆異鈔に曰く、まことに如來の御恩といふことをは沙汰なくして、われもひと善し惡しといふことをのみ申しあへり、聖人の仰せには善惡のふたつ、總して以て存知せざる也、其故は如來の御心によしと思召す程に知り通したらばこそ善きを知りたるにてもあらめ、如來の惡しと思召す程に知り通したらばこそ惡きを知りたるにてもあらめど、煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界は諸の事、皆以て、そらごと、たわごと、まことあることなきに、唯念佛のみぞまことにてはしますとこそおぼせられ候ひしと、吾人千古の宣告也、又吾人永久の生命也。

芭蕉生實枯、
菹醜圍妊死、
愚貪利養苦、

智者所嗤笑、
（雜寶藏經）

菹醜亦復然、
驢驢亦復然、

心蓮開發

(求道學會日曜講話)

近 角 常 觀

今日の題は「心蓮開發」と出して置きました、即ち心の蓮が花開くと謂ふ事である。一寸と聞くとあまりに形容が著しい様ではあるが、實は此の事に就て先日少しばかり感じた事がある。今日此の題を出した次第である。夫はどうかと謂ふに先達て或る人が自分は此の蓮が御縁で信仰に入つたと謂ふ事を私に話された。其話と謂ふのは其人夢の中に蓮の花を見られたと謂ふのである。何んとも夢の中に朝早く木の澤山ある所を歩いて居られた、すると一人の僧あつて手に蓮の花を持て現はれた、其僧が今の蓮の花を示して其人に謂ふには「御前此の花を知つて居るか」と聞いた。其處て其人は「其れは蓮の花である」と答へられると僧は更らに重ねて「御前此の意味が解かるか」と尋ねる。「いや一向解らぬ」と答へられると僧の曰ふ様には「蓮の花と謂ふ者は實に汚き泥の中より生ずる、信仰の花は亦人生の慘憺たる泥中より開くのである、此の信仰の花を心の中に頂けば我々は彼の土に於て蓮の花の上を生れるのである」とこれだけ告げて其僧は去つてしまつ

善も要にあらず、念佛にまさるべき善無きゆゑに、惡をも惡する可らず、彌陀の本願をさまたぐる程の惡なきが故に。此の不思議の御力である、苦しめる者罪惡の者を救ふとの惡人救濟の大慈悲である。此の佛の力此佛の大慈悲が我々の上に加はつて下さり、理屈離れて唯實に難有いと思ふに到れば今迄の善根と謂ひ善惡と言つた事、實に極めて小さい話であつたと解かつて来る。例へて見れば此所に小數の人が集まつて一圓二圓と謂ふ金をさも大事がつて人に惠んで居る、處へ突然一人の人が現はれて如何程でも宜しい、皆んなが欲しい丈け攫み取りにして持つて行くがよいと言つて自分の財産をさらけ出すと謂ふ様な事が起つて来る。そうなつて見ると今迄の一圓二圓の自分の善根は如何にも小さいものであつたと誰ても感ぜずには居られぬやうなものである。既に一度廣大なる佛慈に氣が着いて自分の善根の小なる事が解つて來れば御慈悲の偉大な事、難有き事が身に知れて來る。斯うなつて見ると自分が少し計りの善根を爲たからとて決して之を誇る心も起らぬ、亦譬へ惡を犯したからとて決して其惡を恐れて心配に陥ることも無い。亦他人が惡を犯したにしても今迄ならば容易に許し得無い處であるが、矢張り佛の御慈悲には洩れ無い人、自分として同じ惡人であるものと思ふ事が出来る様になる。どうも味へば味ふ程益々佛陀の御慈悲は不可思議と申し奉るより外は無。處が此の不可思議の佛智が解らぬ中はは前申した通り何時迄も自己の小善を頼みに仕て居る、此を疑ふと申すのである。つまり自力の力味心に、こだわつて佛の大なるみ力を信じて居らぬので、即ち佛陀の大善大

た。此の話を聞いて其人は夢中に在りながら非常に感じられ醒めてからは今迄に無く愉快の身となられた、自分は今迄宗教の事は少しも知らずに居つたのであるが實に奇妙の御縁で慶ばれる身になつた」と言つて居られる。此の話を承はつて私も亦非常に感じた。第一此の人は今迄少しも宗教の事を知らずに居つた人である、其人が一夜の夢が動機で自分から唯斯く感ぜられたのである、然るに其人の言はるゝ事が一々皆信仰上の話に合つて行く、如何にも其人は心から味はれた人である。私は感じた。御承知の通り龍樹菩薩の易行品には「若し人善根を植多て疑へば則ち花開かず、信心清淨なれば花開けて則ち佛を見たてまつる」と謂ふ御文がある、此は親鸞聖人も度々味はつて御出になる御文で實に能く信仰上の有様を謂ひ現はしてあると思ふ。若し人善根を植多て疑へば則ち花開かず、我々が如何に善き事を爲し如何に能く修養に勉めても佛智に疑ひを挟みて居る間に何時迄待つても花の開ける時は無い、花の開けぬとは即ち眞實絶對の開けた思ひが起らぬのである。夫で善き事を爲すは如何程に爲したにしても此の佛智に目の着かぬ間は其の善がさつぱり何の役にも立つて來ぬ、夫れ故此の佛智に目が着いて來たと謂ふ事は信仰上非常なる仕合と申さねばならぬ、こは宿世大なる因縁があつて始めて茲に目を着けさせて貰へたと謂ふものである。一口に佛陀と言へば夫迄であるが、併し自力で善を勵む自分の力で善根を積む、此の間は何んと言つても自分の善根計りに目が着いて佛智の不思議にはどうしても目が着いて居無い。何が佛智の不思議かと謂へば即ち歎異鈔の「本願を信せんには他の

功德に疑ひを挟みて居るのである。

既に度々申たがかの羽村の清水と謂ふ人は「信仰の餘歴」を讀まれてから非常な苦悶を感ぜられた。(第五號實験欄参照)夫は此の書を見られる迄は自分の罪惡と謂ふ方面は少しも氣着かずに居られたが、此書を讀んで見られると第一自分の從來の所業に一として正しきものは無い、其處で何とかして之を改めねばならぬと感ぜられ、色々苦悶を重ねた極終に自殺と迄思ひ詰められたのであつた。けれども夫程迄に思はれたけれども未だ一點佛陀の慈愛と謂ふ事に氣が着いて居らぬもの故、唯徒らに過古を追想しては往事を悔ゆる外何等の所詮も無かつたのである。勿論此の已前と雖も世間普通の倫理から謂へば決して一點でも非難さるべき人では無い、自分でも正しく行ふて居ると計り思はれた位で、世間からも至極眞地目な人となつて居つたのである。夫にも係らず遂に安心が出来無かつたと言ふものは即ち佛陀に對し奉りて花が開け無かつたからである。然るに私が、つた一度御會ひして、貴方はどうやつて苦しんで居られるが佛陀の御慈悲は斯の如き罪惡の者を救うて下さるのであると、廣大なる慈悲の難有き事を御話して居る間に見る、心の苦味か融けて來て涙流して喜ばれた。今も様子を承はれば其時已來、まるで別人の如く成られたと謂ふ事である。従前とて決して惡人では無かつた。唯自力計りを頼みとし、外に偉大なる御力がある事を知られざりしもの故、どうしても信仰の花が開け無かつたのである。けれども一度機縁純熟して佛陀の偉大なる御力に氣が着かれて見ると忽ち心蓮開發して佛を見奉るやうになられたの

である。佛を見奉ると謂ふ事は決して肉の眼で見奉るといふのでは無い、自分の心が開けて来りて、廣大なる御慈悲が疑ひ度くても疑はれぬ様になつたを佛を見奉ると申すのである。此を「信心清淨なれば花開けて佛を見奉る」と仰せられたのである、實に云ふ可からざる味ひの深い御文と思ふ。心の蓮が花開くとはいち此の心に何の屈托も無くなつたのを申したのである。

初めに申した夢中に蓮の花を見られた人は夫で全く信仰に入られた、夫から俄に私が慕はしくなつたと態々私に會つて今の話をせられたのである。其人の夢に開かれた「蓮の花は泥中より生ずるものである、信心の花は人生の苦味の間に開くものである云々」此の事は即ち維摩經の「例へば高原の陸地には蓮華を生ぜず、卑濕淤泥に乃ち此の華を生ずるが如し」とある此文と同じである。凡て人生上の事に於て、財産あり名譽あり學識ありとて、夫で満足して仕舞ふ人は到底信仰を得る事は出来ぬ。信仰は決して不健全の者では無いがさりとして満足の間より来るもので無い、人生の苦し味の中よりして生ずるのである。同じ人間にしても其人得意の時には決して出て来ぬ、一度失意の境が来りて人生の苦を経験した時に始めて湧いて来るのである。夫であるから人の性質に就いても矢張り性質の善良なる人は信仰には入り難くて寧ろ性質の善く無い人が入り易い。同じ人生に在つても内心に左程の苦痛を感じず、易々として行爲を誤らぬ様の人には信仰上より見れば寧ろ不幸の人である。去りながら此等の人でも一度慘憺たる人生の苦味を實驗するに到れば皆同じく必ず信仰を

らるゝや否や、衆生の煩惱は忽ちに清められ心中歡喜を生ずる云云」との話があつた、中々味ひのある話であると思ふ。之を要するに一度は佛陀の光明に照らされ參らせて心中に於て信心の花が開けて来れば、人生の淤泥の中に在りながら佛陀の慈悲が難有くなる、夫れと共に色々煩惱の濁りが生じても再び信心の力で其濁りが去つて仕舞ふやうになるのである。茲の具合が即ち「信心清淨なれば花開けて佛を見奉る」と謂ふ味ひである、同じ淨土の法門なれども親鸞聖人は實に斯の如く實驗的の意味に於て御味ひなされてあるのである。夫で花の開ると開けぬとは實に佛智の不可思議を感じると感ぜざるとの、この區別に歸するのである。

斯の如く親鸞聖人の著書は、之を讀めば讀む程、佛法不思議、名號不思議、誓願不思議などの考が聖人の信仰の奥に隠れて在る事が解かる。曇鸞大師の「淨土論註」には、五種の佛法不思議が説いてある、夫を親鸞聖人は直ちに和讃に於ていつゝの不思議をとくなかに、佛法不思議にしくをなき、佛法不思議といふことは、彌陀の弘誓になづけたり、と仰せられた。私も昔は親鸞聖人も随分勝手な事言はれたものと思つて居つた、今から思へば不可思議を不可思議と味へば不可思議の味ひは解かつて来て下さるのである。第一に苦しい時に於て佛智を思はして貰へば其苦し味が自然に去ると謂ふは如何にも不可思議の事である。前にも申した羽村の清水氏が私の歡異鈔の話を聞きつゝ、初めて發せられたも「實に不可思議である」との一言であつた。親鸞聖人は宣はく、

誓願をはなれたる名號も候はず、名號をはなれたる誓願も

發起し來るのである。斯の世の苦味が解かり來り、人生の頼み少きを感ずると共に佛の清淨眞實心は必ず現はれて下さる、即ち信仰は苦しい心、煩惱の中より生じて下さるのである。偕て蓮の花の開くのは泥の中より開くのであるが、開いた花は少しも泥に染まら無い、佛の御力己外のもの、自分の力で作上げた者ならば何と爲ても泥の臭さを離れる事が出来ぬが、此の佛より賜はる無染清淨の信仰これ計りは永久に煩惱の爲めに汚さるゝ事か無い。善導大師の二河白道の御譬喩には火の河水の河の真中に唯一道の白道が火にも焼けず水にも溺れずしてある。此の白道は即ち佛陀より頂いた清らかなる佛心である、貪愼無量の煩惱を貯へ居つても此の佛心計りは何時迄も之等の爲めに汚がされ無い事を御示しなされたのである。處が煩惱の中へ頂く信仰なれども、一度此の信仰が輝いて下さると、夫等の煩惱は忽ち清められて仕舞ふ。「淨土論」には此の御力を譬へて、恰も摩尼の寶珠を泥水の中に投げ入れると其水忽ち澄み渡るが如しと仰せられてある。夫に就て思ひ出したが先日私は喇嘛教の僧侶を連れて巢鴨の眞宗大學へ參つた、此の喇嘛教の僧侶と謂ふは清國奉天皇廟の住僧で此度日本に來遊せられたのである。其節眞宗大學に於て一場の談話をせられたが、其話が實に能く眞宗に似て居る。

「喇嘛教に於てはオンマミタメホンと謂ふ事を言ふ、つまり南无河彌陀佛である。處が其中オンとホンは印度の秘密語で、マミとは摩尼寶珠である、タメは蓮である、即ち蓮華の中に在る珠と謂ふ事である。其處で南无阿彌陀佛と謂ふ事は蓮華の中に在る珠と謂ふ意味で、之を衆生の胸中に投げ入れ候はず、たゞ誓願を不思議と信じ、また名號を不思議と一念信じとなへつる上は何條わがはからひを出すべき、さゝりわけしりわくるなとわづらはしくはなれさせられさふらふやらん、これみなひかことにて候なり、たゞ不思議と信じつるうへはとかく御はからひあるべからず候、往生の業にはわたくしのはからひはあるまじく候なり、あなかしこ、云々(末燈鈔)

人の心で彼是れ思ふて無い、唯不思議と信じ奉るのであるとの御示である。此れから能く伺うて見るに親鸞聖人の信仰は是である、初めて法然聖人を御訪ねなされ他力攝生の道を御授りなされた時も矢張り亦此の通りである。歡異鈔に於て此の時の御心を御示し下された。

親鸞に於ては、たゞ念佛して彌陀にたすけられまいらすべしと、よきひとのねほせをかうふりて、信ずるほかに別の仔細なきなり、念佛はまことに淨土にむまるゝたねにてやはんべらん、また地獄にねつる業にてやはんべらん、總じてもて存知せざるなり、たとひ法然上人にすかされまいらせて、念佛して地獄にねちたりともさらには後悔すべからず候、云云、

全く理屈を離れて不可思議を不可思議と信じたる信仰である。更らに「行卷」に於ては口を極めて名號の不可思議を御讚嘆なされてある、開卷劈頭より宣はく、

謹しんで往相の廻向を案するに、大行あり、大信あり、大行といふはすなはち無碍光如來の御名を稱するなり、此の行はすなはちこれろ／＼の善法を攝し、もろ／＼の徳本

を具備せり、極速圓滿す、真如一實の功德寶海なり、かるか
ゆへに大行となつく、

と、是が真最初の文である。南无阿彌陀佛の御名を稱へれば
何時の間にか從來の苦悶が頓に去つて仕舞ふ、此の不可思議
の名號故に極速圓滿の名號である。圓滿とは此の御名を稱す
る迄は我々の内心に如何程の苦悶不平が有つても、一旦之を
稱へれば忽ち今迄の不足は消えて心に平和満足を興へて下さ
る、此等は現に我々の日常經驗して居る處である。夫故圓滿
と稱讚せられたのである。真如一實の云云とあるも同じ事て
聖人は此上何とたゞえてよいか、言語絶え果てた極、真如一
實の功德寶海なり」と仰せられたのである。夫より聖人は「行
卷」に於ては色々の經文を引用して來て力を盡して名號不思
議の功德を讚仰なされた。最後に到つても、言葉が無い、終
に念佛諸善比較對論して其最後に宜はく「金剛信心絕對不二
の機也」とある。此の不可思議の佛名を信じた我々の信仰の
有様は我々の自力で信じたては無い、如來廻向の信心である、
然れば我々の信仰また絕對不二の信である。斯くて其次ぎに
直ちに語を改めて曰く

うやまふて一切往生人等にまふさく、弘誓一乘海は無碍、
无邊、最勝、深妙、不可說、不可稱、不可思議の至徳を成就
したまへり、なにを以ての故に誓願不可思議なるが故に、
猶ほ言ひ盡す事が出來ぬ、夫から再び筆を起して、幾十の譬
喩を重ね言を極めて不可思議佛力を稱讚なされてある。けれ
ども譬喩を以てしてもまだ充分に意を盡し切る譯にゆかぬ。
彌々の最後に臨んで

別も出來て來て到底安心はならぬのである。大願清淨の報
土には品位階次の區別が無い、皆等しく正覺の華より化生し
て廣大なる慈尊の力に會ひ奉るのである、此の時が即ち我々
の眞の證りを開く時である。また此の土にある間は種々の障
りがあり、煩惱の黒雲は時々信心の天を蔽ふ事がある、此土
を以て直ちに證りと言ふ事は出來ぬ。歎異鈔には

煩惱具足の身を以てすてにさとりを開くといふ事、この條
以ての外のこと候(中略)おほよそ今生に於て煩惱惡障を
斷ぜんときははめてありがたき間、眞言法華を行ずる淨侶、
猶ほ以て順次生のさとりをいひのる、いかに況んや、戒行慧
解共になしと雖、彌陀の願船に乗して生死の苦海をわたり、
報土の岸につきぬるものならば、煩惱の黒雲早く晴れ、法
性の覺月すみやかにあらはれて、盡十方の无碍の光明に一
味にして、一切の衆生を利益せんときこそ、さとりにて
は候へ(下略)

とある。此身に無上寶珠の信心は頂いても此土に在る間はま
だ煩惱の卷に居るのである。去りながら一度娑婆の縁が盡さ
て此の肉身が畢れば直ちに七寶の清淨土に生れ、穢れ無き身
と定めて頂くのである。

偕て此の上に猶ほ一ツ御話爲度いのは、此の不可思議の佛
智を疑ふ者をも、佛は亦大慈の御手を延べて救濟し給ふと謂
ふ一事である。人間にしてみても若し自分の本意を理解して
呉れぬ者があれば此程不愉快の事は無い、然るに佛陀は自分
の本意を理解せぬ、佛陀の本願を疑つて居る人間をも結局は
果遂の力によつて引き着けねば置かぬと誓ひ給ひたのであ

しかれば大聖の眞言に歸し、大祖の解釋を閲して、佛恩の
深遠なるを知り、正信念佛佛をつくりていはく、
無量壽如來に歸命し、不可思議光に南无したてまつる、云
云、

終に偈文を作つて嘆喩なされた。夫て眞宗に於て且暮の勤行
に拜誦する正信偈は實に此の讚嘆文である。已上申し述べた
處が「行卷」一部に現はれてある親鸞聖人の自驗的の信仰であ
る、聖人が如何様に絕對不思議を味はれたか、名號不思議、誓
願不思議、佛法不思議を御味ひになつてたかは略ぼ伺ひ奉る
ことが出來やうと思ふ。

偕て此の偉大なる不可思議の御力を信じ無い者はどうか、
夫れは自力作善の人である、之を不了佛智と言ふのである。
大無量壽經には此れ等の人の事をば、「佛智不思議智不可稱智
大乘廣智無等無倫最上勝智を了らず」と謂つてある。斯る不
思議智を信せずして而も猶ほ罪福を信じ善本を修習する人は
即ち疑心の善人である、之等の人は五百歳の間牢獄の内に繋
がれて出る事が出來ぬ、亦是は花に含まれて出る事ならぬ含
花未出の人である。此の疑城胎宮、含花未出と謂ふ事は強ち死
後の彼の土に於てのみ考へずとも信仰の經驗上此の土に於て
能く解かる。先き程より申した佛智に疑のある間は何程苦し
んでも到底信仰の花は開か無いと謂ふ味は正さに是れてあつ
た。此等の人々は丁度蠟燭やランプの光りの様である、ラン
プや蠟燭の光りは太陽の前に出れば忽ち蔽はれて光を放た無
い。然るに此の大なる太陽のあるに氣着かずして唯徒らに
ランプや蠟燭の光を彼是れ言つて居れば種々の小六かしき區

る。斯くて佛智を信じた者も信ぜぬ者も一味平等に佛の智
慧海に投下して行くのである。親鸞聖人は此の味をば歎異鈔
に於て

信心かけたる行者は、本願を疑がふによりて、邊地に生じ
てうたがひの罪をつぐのひて後ち、報土のさとりを開くと
こそうけたまはりさふらへ
と仰せられた。して見れば佛陀の慈悲は二重にも三重にも衆
生の上に加はつて居る、信ずる人あり信じ得ぬ人あり、花の
開く人あり、開けぬ人あれ共開かぬ人と雖も最後には必ず開
けて下さるのである。和讃に於て

信心の人にちとらじと、 疑人自力の行者も、
如來大悲の恩を知り、 稱名念佛はげむべし、
と咏ぜられしも全く此の味ひである。猶ほ一つ、一旦眞實淨
土に生るれば還廻向の徳益で更らに亦化導の爲めに此土に
出て來られるのである、丁度蓮の實より更らに又蓮の華が生
ずる如きである。佛教に於ては蓮華より譬喩を引き來る事が
極めて多い、中に言ふに言はれぬ味ひが込められてある。今
日は先づ此丈けに爲て置く事とする。

慈心功德之訓

般舟三昧經云、 慈心比丘終不中毒、
終不中兵、 火不能燒、
入水不死、 帝王不能得其便、

信仰は廣大勝解也

(求道學舎日曜講話)

近角 常觀

今日は題を出すのが後れて新聞に出て居りませぬが「信仰は廣大勝解也」と謂ふ題である。此の語は親鸞聖人が度々仰せられた言葉で、其初めは無量壽如來會と謂ふ大無量壽經の異譯の聖經に出て居る。即ち文字の通りで廣大とは廣く大きく、勝解とは勝れたる了解といふ、御存知の通り親鸞聖人は餘程味ひのある詞と思ひなされたと思はれ、聖人の著書には毎度此の詞が出て来るのである。私は此頃畧文類と謂ふ親鸞聖人の短ひ聖教を拜誦して居る、この略文類と申すは教行信證を短かくした者で、教行信證を讀んだ後に此の書を拜讀すると、さながら聖人が教行信證中の特に深く味はれた箇所を抜き出された様で一入難有い。其の略文類には信心の人の有様を廣大勝解者と稱せられてある。即ち我々が信仰に入りて佛陀の慈悲が届いて下さると、心中廣ろくとなりて何事も皆能く解つて来る、此の有様が廣大勝解なのである。親鸞聖人は廣大勝解と謂ふ詞が經文にあるからとて茲に之を引用なされたのでは無い、聖人が御自身に實際的に御味ひなされ、信仰を頂いた人、佛慈の解つた人は如何にも人生が解つて来る、其有様は實に廣大勝解であると謂ふ御實感から之を御用ゐなされたのである。夫て此意味を能く御話する爲めには先づ世間普通の人が信仰に就いて疑難として居る處から御話するが

善からうと思ふ。

此の中には左様の方は無いが能く世間では信仰は智であるとか情であるとか、或は意志であるとか謂ふ人がある、或は此の點から見れば信仰は智であるとか、其の點より見れば情であるとか、所謂事を頻りに言ひ度がる人が随分とある。或人は言ふ、世間普通に於ては信仰は情であると謂ふて居るが情丈けては到底解からぬ、非常なる智の満足が無くてはならぬ、夫れて智は哲學科學に因らぬければならぬなど、謂ふ事を言ふて居られる。斯様な事は今日御集りの諸君の前では殆んど問題にならぬのであるが、一應申て見れば信仰はそんな單純な情であるなど、謂ふ事の出来る者では無い、單に人間感情上の嬉しいとか悲しいとか喜怒哀樂の情の如きと同様に視らるべき性質の者では無い。若し之を心理學的に言うて信心歡喜の情があると言ふならば亦一方には人生に就て充てん見通しの着くと謂ふ大いなる智がある、人の解からぬ佛の智慧が解かり、人の解からぬ人生が解かつて来る、故に情と共に智の方にも立派に解つて来るのである。唯一つの注意を言へば智と謂つても學問上の推理では無い事である、學問上の推理と謂ふのは相對的の智慧に過ぎぬ、眞實物が解かると謂ふのは、光りの物を照す如く、理屈推理を離れた絕對の智慧である、此の眞實の智慧は信仰上に於て獨り存するのである。我々人生の事を凡夫相對の小智で推し計り、あゝのこのつと言つて居るが、一度は信仰が輝やいて来ると隅から隅迄皆一時に解かつて仕舞ふ。親鸞聖人の書き物を能く拜見して見るに、聖人の仰せられる喜びは決して單に嬉しいと謂ふ様なそ

んな相對的の歡びでは無い、もつと絕對の歡びである。實際御慈悲が感ぜられての歡喜には理屈も推理も何も無い、唯「何事のちはしますかは知らねどもかたじけなさに涙こぼるゝ」の歌の如き味ひである。斯く佛陀の慈悲が慶ばれ、佛陀の智慧が解つて来れば、人間の小智を超越した非常な事の解かる大なる智慧を得るのである。猶ほ更らに進みて言へば智慧計りて無く力が出て来るのである。「我が爲せる仕事は佛陀の仕事である」、「我には佛か護て居て下さる」、「斯の如きては冥見に對して申譯が無い」と謂ふ具合になり、言行舉動、自ら力を用ゆるては無いが、偉大なる力を感じて自然法爾に活動が出来るやうになる。即ち智情意の三つが皆な満されるのである。けれども智情意の三を満足すると言つてはまた拙い、智情意の三つ全體が絕對の有様と成ると言ふ方が善い。喜びても相對の喜びの間は彼はいかぬ、此は善いと謂ふ事が有つて、喜びの中にも思はしきものがある、去りながら信仰の歡びには世の中に喜ばれぬものか無い。世界中の者敵でも味方でも不平でも失敗でも皆歡びとなりて現はれる、凡情ではとても心に叶はぬと思ふ事が凡て難有くなつて来る、此の歡びは即ち眞實絕對の情である。親鸞聖人は「心を弘誓の佛地に樹て情を難思の法海に流す」(化身土卷)と仰せられた、此の情とあるが是れである。甲が悪いとか乙が善いとか謂ふ人間の情は相對の者で、之は我々の苦惱を増す外何の役にも立たぬ、此の我々の相對の情を佛陀の絕對の情の中へ流し込むのである。斯くて現はれ来りたる情は即ち眞實絕對の情で、已前の如き窮屈の者で無い、此に於て世間の凡ての事に就て大なる安

樂を得て、所謂信心歡喜となる。此の歡喜は最早や歡樂悲哀などの凡情では無くて、何者も犯す事の出来ぬ絕對の歡喜である。處が此の歡喜を催せば心の明るみも亦おなじく加はつて来る、親鸞聖人は光明は智慧である、智慧は光明の形であると申された。一度は佛の光明に接して心の内に明るみが出れば凡ての事に皆な見通しが着く、即ち之を智慧の方から言へば、實に廣大勝解である、決して學問上の區々たる小智では無い。

夫から更らに進んで之を言ふ時は、能く世間の人か他力の宗旨は情である、禪宗は智であるなど、謂ふ事を言ふ。成程をう言へば日蓮宗は意の宗教であると謂つても可い、確かに之は一面に於ては最である。去りながら、前にも申した通りて眞宗が情であると謂つても、單に之が情の一方面計りては無い、人間の心は左様に一方にのみ傾く事を許さぬ。他力の信仰に於ては今も申した如く解からぬ者が解かつて来り、人生上の凡ての事に見通しが着く様になる、解からぬ事は解からぬとして見通しが着く様になるのである。此の人生上の事に見通しが着くと謂ふは決して容易の事では無い、此は著しき智慧と申さねばならぬ。亦禪宗の悟に於いても同じ事であらうと思ふ。何の點から考へても信仰は確かに廣大勝解の智慧である。

親鸞聖人は此事を非常に深く味はれた、夫は「信卷」を拜讀すると明かに見えてある、「信卷」の下の方は殆んど此の味ひを御説きなされたと謂つても可いので、信心を得れば如何に

なるかと謂ふ即ち現生十種の益の所などは是である。いつも御文を拜讀する事が多い様ではあるが今日も一寸其の所を拜讀して見度いと思ふ。猶ほ此は御參考迄に申して置くが「信卷」の上の方は至心信樂欲生我國を説いた者で、乃至一念の有様を漸々引き延ばして御説きなされたのが下の方である。夫て下の方は一念に信仰に入つて段々と歡びが出て現在に於て佛陀の境界を味はせて貰ふ其有様を御書きなされたのである。今拜讀し奉るは下の現生十種の處である。

然るに經に聞といふは衆生佛願の生起本末を聞きて疑心あること無し、之を聞と云ふ、信心といふは即ち本願力廻向の信心なり、歡喜といふは身心悅豫のかほばせを現はす貌なり、乃至といふは多少を推する言なり、一念といふは信心二心なきが故に一念と曰ふ、是れを一心と名く、一心は則ち清淨報土の眞因なり、金剛の眞心を獲得する者は横に五趣八難の道を超えて必ず現生に十種の益を得、何者をか十とする、一には冥衆護持の益、二には至徳具足の益、三には轉惡成善の益、四には諸佛護念の益、五には諸佛稱讚の益、六には心光常護の益、七には心多歡喜の益、八には知恩報徳の益、九には常行大悲の益、十には入正定聚の益なり、宗師の專念と云へるは即ち是れ一行なり、專心と云へるは即ち是れ一心なり、然れば願成就の一念は即ち是れ專心なり、專心は即ち是れ深信なり、深信は即ち是れ深信なり、深信は即ち是れ堅固深信なり、堅固深信は即ち是れ決定心なり、決定心は即ち是れ无上々心なり、无上々心は即ち是れ眞心なり、眞心は即ち是れ相續心なり、相續心は

の願より出たり、亦至心信樂の願と名く、復た往相信心の願と名くべきなり、然るに薄地の凡夫、底下の群生、淨信獲難く極果證しがたし、何を以ての故に、往相の廻向に由らざるが故に、疑網に纏縛せらるゝが故に、乃し如來の加威力に由るが故に、博ろく大悲廣慧の力に因るが故に、清淨眞實の信心を獲しむ、是の心顛倒せず、是の心虛偽ならず、信に知ぬ無上妙果の成じ難きにあらざり、眞實の淨心實心を得るといふは、經に言はく、其至心に安樂國に生ぜん」と願することあれば智慧明かに達し、功德殊勝なることを得へし、又經に言はく則ち是れ大威徳の者なり、亦廣大勝解の者なりと説けり、

實に難有い御文である。一應御文に就て申して見れば、何故に我々は信仰を得難いのかと言ふと、即ち往相の廻向に因らず、人間の微々たる小智に味練を残して偉大なる佛智を疑がつて居る故である、一點でも自分の計ひにこだわつて居る間は何時迄待つても信仰の得らるゝ時は來ぬ。今はどうして信仰が得らるゝかと言へば即ち如來の加威力を蒙り、大慈悲の御方に因るからである。我々は一向に知らず居つても、善き様に計らつて下され、信仰を得なくては居られぬ様引き廻はして、遂に信仰に引き入れ給はるは則ち如來の大悲廣慧の御力である。亦此の廣大なる慈悲に浴して世界中何も恐るゝ處なしと喜んで居られるは加威力の力である。既に一度び如來の御力で信仰に引き入れられて見れば、最早や人生に何等の不安も無い、勿論自分の身分を叩けば已前に異ならず淺間しき

即ち是れ淳心なり、淳心は即ち是れ眞實の一心なり、眞實の一心は即ち是れ大慶喜心なり、大慶喜心は即ち是れ眞實の信心なり、眞實の信心は即ち金剛心なり、金剛心は即ち是れ願作佛心なり、願作佛心は即ち是れ度衆生心なり、度衆生心は即ち是れ衆生を攝取して安樂淨土に生ぜしむる心なり、是の心即ち是れ大菩提心なり、是の心即ち是れ大慈悲心なり、是の心即ち是れ无量光明慧に由て生ずるが故に、願海平等なるが故に、發心等し、發心等しきが故に道等し、道等しきが故に大慈悲等し、大慈悲は是れ佛道の正因なり。

此れ程迄に、佛の慈悲を喜ばぬ人に之を知らして共に信を取り度いと謂ふ大慈悲心の發動であると言はれてある。此れより猶ほ種々の經釋文を引用して此の心持ちを繰返し仰せられてある中に、初めに申た無量壽如來會の文を茲にも御引きなされてある。即ち

法を聞きて能く忘れず、みて敬ひ得て大きに慶ば、則ち我が善き親友なり、又言く、其れ至心有つて安樂國に生ぜん」と願する者は、智慧明かに達し、功德殊勝なることを得べし、又廣大勝解者と言へり、又是の如き等の類大威徳の者は能く廣大異門に生ずと言へり、又言はく、念佛する者は當さに知るべし、是人中の分陀利華なり、

斯の如く示されてある。念佛を喜ぶ一念の中に慈悲も智慧も共に込められてある。偕て此れを短かくし其要を取つて御書きなされた者が即ち最初に話した略文類中の文である。曰く淨信と言ふは則ち利他深廣の信心なり、則ち是れ念佛往生

罪體で、此の點よりすれば眞に絶對の謙遜である、さりながら佛陀より賜はりたる信に於て立つ時は世界中誰に一點憚る所も無く、何處迄も此信を以て通す事が出来る。されば此の信は自ら顛倒せんと欲しても之を顛倒する事は出來ぬ、亦自ら虚偽ならんとしても能はぬのである、如何にも此の心顛倒せず、是の心虚偽ならずである。處て茲に一つの注意すべきは普通我々が眞を取り度い偽を離れ度いと思ふ心は未だ自力の心で絶對の心で無い、若し眞實絶對の心であれば自ら他にうつらんとしようとする事が出來ぬのである。此に就て能く問題となるのは前號の求道にも書いて置いたが信仰と禪の兩門である。此の兩門は何れよりも絶對に達するなれば兩者を同時にやらうと謂ふ人が往々に有る、私は此はいけ無いと思ふ。若し人が眞實信仰の味はつて居る人であれば私の經驗によると、たとへ他の教に手を出し度くても到底手の出せるもので無い。禪を経験する爲めに暫時念佛の心を抑えやうと試みても、眞實信仰の人であれば何とした處で抑え切る事は出來ぬ、即ち清淨眞實の心は決して顛倒する事が無いのである。其處で斯の如き不動の心、眞實の心は如何にして來るかと言へば即ち佛を信する事によつて生ずる、佛を求め様とはせずして唯徒らに絶對の境地を開かうとして夫は到底不可能の事である、如何にも無上妙果の成じがたきでは無い、眞實の淨信が得がたいのである。夫て此の信を頂けばどうなるか、大慶喜心を得る、大慶喜心を得るとは先き程より申したる大いなる智慧を得るので、即ち其人は廣大勝解の者であると御説きなされたのである。

偕て此の廣大勝解の詞を如何に親鸞聖人は着目なされたかと謂ふに先づ第一に前に申した通り「信卷」に御引用なされてある、次には今拜讀せる如く教行信證を縮められた畧文類にもなづく御引きになつてある。處が此の外に亦「行卷」の最後に於て絶對不可思議海を御讚嘆なされた「正信偈」と謂ふがある、其の正信偈に於ても親鸞聖人は矢張り此の語を御用るなされてある、如何に能く聖人が斯の語に着目せられたかは是て伺ひ得ると思ふ。正信偈には即ち宣はく、

一切善惡の凡夫人、

如來弘誓願を聞信すれば、

佛廣大勝解のひと、言へり、是の人を分陀利華と名く、

抑も此の正信偈と謂ふは聖人が眞宗の七祖の各要點を御授みなされ、善導の要點は斯うである、道綽の要點は茲であると謂ふ具合に要點を抜いて御編りなされたものである。然るに斯の如く正信偈に迄此の語を引用せられたのを見ると廣大勝解が寧ろ信仰の有様で無いか、信仰の有様は情と言ふよりも寧ろ凡ての事に見通しの着いて來る智力と言ふ方が可いものでは有まいかと迄思はるゝ位である。夫は無論慶びも起つて來るが何れかと言へば寧ろ智の方が先き立つ様に思はれるのである。智と申しても先き程も申した如く決して理屈の智慧では無い理屈の智慧は極く僅かな分別の智慧である、信仰の智慧に至つては絶對無分別の智慧なのである。或る問題を決めるに當つてあれはどうか、是れは斯うかなど謂つて居るのは、理屈の智慧の故で、信仰の智慧に於ては決してそんな物で無い、是は經驗のある方には直ぐ御了解が出來るであらうと思ふ、即ち信仰の上より言へば解からぬ事は

の事である。我々は目の前の不思議計りを知つて此の偉大なる不可思議のある事を知らぬ、名號不思議や誓願不思議や願力不思議などの大いなる不可思議を忘れて居る。けれども一朝不可思議を不可思議と信ぜらるゝに到れば、忽ち斯の絶對境が現はれて何もかもが皆な解かつて來る、此の味を廣大勝解の智慧と謂はれたは誠に適切な語である。

夫れて更らに之を言へば信仰の智慧は全く佛陀の心である、我々人間の智慧は相對的の極めて狭い智慧であるが、此の佛陀の心を信ずれば此の大いなる佛陀の智慧が頂ける、故に信仰を得た者は自分の智慧は拙くても非常なる絶對智慧を有する様になるのである。能く注意して見れば親鸞聖人愚禿鈔に於て

賢者の信を聞いて、愚禿の心を顯はす、賢者の信は内は賢にして外は愚なり、愚禿の心は内は愚にして外は賢なり、

と仰せられてある。此の文は嘗ても申した通り聖人が自分の淺間しさを懺悔せられたもので、賢者の信とは御師法然聖人を意味せられたのでは無いかと思ふ。聖人の目よりして御覽なると賢者の信は實に貴く立派である、之を思ふと聖人自身の心は實に醜く穢くて誠に懺悔に耐へぬとの意味である。則ち愚禿本來の心は實に愚の極であるが此度は大いなる智慧を授かつて往生するのであると謂ふ事である。全體此の懺悔と謂ふ事は他力の上に於ては凡夫の淺間しき機に就ての、謂はば計ひ心である、佛陀の慈悲をながめた時は如何に自分が淺間しくても、如何に自分が罪深くても少しも構ふ處では無く、もともと無分別の智慧であれば其有様は實に快刀亂麻をたつ

解からぬとして「知らざるを知らざるとす、是れ知れるなり」と謂ふ具合に直ちに佛智の不可思議に向ふのである。不可思議の佛智を見たる程世に廣大の智慧は無い、人間が互に腹を立て不足を言ふは自分の狭い智慧に陥つて自分計りを上げて居るからである。佛陀の智慧はひろくとして限りが無い、此の智慧が一度頂けて來ると世界の事人生上の事、大は目下の日露戦争より小は一家の内、一人の心の持ち具合迄皆な佛陀の廣大智の働である。夫は本來無分別の智慧であるから之を證明して示す譯には行かぬが、誰でも信仰が解つて見れば如何にも不可思議で、とても疑ふ事の出來ぬ様になる。私か考へるには此の佛の光りが世に満ちて下され、佛の智慧が一切の上に加はつて居給ふと謂ふ事が解つて始めて人生の眞の味ひが現れて來る事と思ふ。けれども唯人生上の凡ての事が佛智の働であると言つた丈では要領を得難い、此の佛智の働さと謂ふ事は結局は即ち人生上のあらゆる苦味を救はせ給ふ大慈悲心の發現である、是れをば最も解る様に願力の不思議と申し奉るのである。此の願力の不思議が明かに解るのが即ち今日申したる廣大勝解と謂ふ事である。

蓮如上人に御弟子の方が六字の名號が燒けて六體の佛になつたは不思議であると申された。其時蓮如上人は左様の事は何の不思議でも無い、もとゞ佛であるから佛にならせ給ふは少しも怪むに足らぬ事である、去りながら不思議と謂へば惡凡夫の我々が佛に成るこそ實に不思議であると仰せられてある。我々の苦しみの心中より清淨の智慧が生じ、我々の妄念の穢き淤泥中より信仰の蓮華が開くと謂ふは如何にも不思議

が如きである。此智慧が人生の上に輝いて下されて始めて人生は活きて來る、人生凡てが此の智慧の御働さと思ふ時は愚痴に陥る事も無くなつて任舞ふ、大は日露の戦争より小は一家の不和に至る迄此の智慧に由て見れば世上の事一として解決の出來ぬ者は無い。蓮如上人は御文に於て

夫れ八万の法藏を知るといふとも後世を知らざる人を愚者とす、たとひ一文不知の尼入道なりといふとも後世を知るを智者とすといへり、

と仰せられた。亦聖人は和讃に於て

智慧の念佛うることは、法藏願力のなせるなり、

信心の智慧なかりせば、いかでか涅槃をさとらまし、

とも御書きなされてある、これ等皆なおなじ意味である。

已上今日は廣大勝解の文字に就て絶對の智慧を實驗的に味はして貰ふ有様を御話し致した、斯の如く實に一の信仰にあらば、世上の事凡てに満足が生じて來る、禪宗にある直覺的の悟りの心持迄か味はれる様になつて來るのである。今日は新聞に出て居ない爲めに來集の諸君も甚だ少かつたが、却て少なかつた爲めに一層しんみりと味はせて貰へたかと思ふ。之を今夏の最終の會として八月中は休會致し九月早々亦再び御目にかゝりて共に喜ばせて貰ふと思ひます。之より信仰談話會にうつります。

* * * * *

實 験

無我の實驗

福高 政澄

拜啓 懺悔する心にも慚愧の心あるが如き罪惡の孤兒なれば、佛天の慈光は、とも柔和になつかしく力よく靈感せしめ給ひて、日々を送らしめられ候。殊に京都へ來りしより三十日目に、佛は日曜學校と告白會を開設せしめ給ひて、私を活動せしめられ、漸々盛大となりて、日曜學校には百餘名の少年少女無邪氣の聲を張り上げて佛を讃唱致し居候。其天真爛漫の動作はさながら天使の戯れに有之我等の一舉一動一言半句、自己の智識を少しも用はずして模倣いたし候。告白會は日曜學校關係者が精神修養の爲めに組織せられしものに候へ共求道者は何人にも來會を拒まず、共に慈光を仰ぎ居り候。福高君亦來會せられ不可思議の慈光に攝せられ給ひて歡喜致し居られ候。別紙の告白は君の有の儘を記されしものに候、求道誌上に御掲載下され候は、仕合に候。小生不思議にも當地にて活ける修養と活動との道を興へられ、佛の御心のまゝ少しの暇も無く働き居り候。何れ詳しく御通知申上げ道兄弟姉の應援を願度く存居候。早々頓首

無漏田 實拜

私は不幸にも幼少にして父を失ひ、それと同時に種々なる事情は平和なりし家庭に波瀾を起してより、私には愛したまふ兄弟なく愛すべき弟妹なく、唯一人の母のみと心さびしくたよりなく且悲惨なる憂き家庭の人となりました。夫故活潑なる氣風なく眞摯なる動作なく鬱々として憂にのみ沈みました。されば猜疑の心人を中傷し、我を苦悶せしめ、たよりなき我は反抗の心つよく、彼かくすれば我れはかくせん、我

の外はすべて人を敵視して、愚痴猜疑怨恨の念はなる、こととなりて私の胸中を塞ぎ、福岡佛教中學に入りて多くの人に接し事に觸れては、我の痲疾擴がりて益々因循となり、苦悶の門に入り、煩累の巷に迷ひ始め、心中常に暗鬱たる雲に覆はれて、あらゆる事物を考へ初め、考へれば考へるほど苦悶は増し、其結果私は此の人生がいやになり、早く我を救うて此の苦しみのがれさせてくれるものはなきかと、日々救主を求めました。中學校卒業前に信仰談話會が開かれ、友に連れられて一度行きましたが、後は欠席がちとなり、終に在學中私の苦を脱せしむる救主はありませんでした。

私は一日或る人に問いました、私の苦しみはいかにして脱れること出来得やうかと。其の人は答へたした、佛陀を信ずべし信仰の門をたけ、しかれば汝の苦は救はれんと。茲に於て佛陀はいかなるものか、信仰はいかにして得らるゝかと私は求道の念に日夜惱まされて、この苦悶の暗と求道の心とを抱きて京都の地に遊學することになりました。

この地に來りて間もなく六條に私と同宿して居る無漏田君等が、告白會なるものを開かれましたから、道を求めていきます私は直に行きました。第一回は初めの事であるからさほどいやとも思はなかつたが、無漏田君が嘆異鈔を引つはり出して、やれ佛は不可思議なものである、佛は慈悲の塊である、佛はなつかしい御方である、吾れは佛の力によりてすべての仕事をするのであると、佛！佛！と、誠になつかしうに、眞に思議すべからざる様に、話しをせられた。私はそれをを

かしい馬鹿な奴であると思ひました。佛が何が慈悲のかたまりであるか、何處が不可思議であるか、私の苦を脱れさせて下さることの出来ないものが、何がなつかしいかと一人て笑つていました。しかし私は如何になしたれば無漏田君の様に佛がなつかしくなるであらうかと考へました。第二回はほんとに馬鹿げたもので、こんなつまらないものが告白會であるかと思ひました。何となれば私は信仰はどうして得らるゝかと、問ふた、或る和尚は長いむつかしい理屈をならべて、ありがたそうな講義をして信仰を得させ様としたが、私は佛に近くことは出来なかつた。私は此の時佛は如何なるものであるか、何ぞ私を救うてくれんのであらうか、地獄はあるのであらうか、極樂はあるか知らん、ないと考へれば何だか心細く、又信心はこうせねばならん、あゝせねばならぬ、こう思ふてはいかない、あゝ考へては我がはからいと言ふので、私の心は支離滅裂となり、丸て長夜の旅路を急ぐ様で、心は實にたよりなく人生は風にも切れそうな糸にさがつて底なき深淵の上を渡る様で實に心細くありました。

第三回にはもう出席する元氣もなかつたが、同宿の無漏田君に對して出席しました。この日は最初に掬月と云ふ人が、自分はあれがと云ふことが非常に強く、昨日もさういふことから瞋恚の炎むらむらと湧きたち、一日中怒り夜になりてある友か、君は不平なきかと云ひしより、我があやまつて居つたと云ふ事を知り、其夜更け行くも眠りに就かれず、一時頃になりて告白會の事を思ひ出し、われはいさぎよく懺悔して罪を謝せむと決して心安く眠りました、私は今心のままと告

白します、自分のあやまちを人の前で告白することの出来る様なものではないが、我と云ふものが捨てられて……と云はれしを中ば聞き驚き、直に私は自分で我をすることが出来ましかと問ひつめた。所が否え私の力では出来ないが佛の不思議の力で出来ますと答へられました。しかし私にはわからなかつた。この時非常に苦しくありました。私はどうして不思議な力で我がとり去られないのであらうかと、心は炎をもつてやかれ、胸は千々に碎かれる様で、苦しめて苦しめて座に居ることが出来ませんで、立て逃げましたがますます苦しく、再び席にかへつたら、私に所感はないかと問はれました。其時は私はたへきれず、胸もはりさける様に苦しみました。其の苦しい中から叫びました、私はどうしても我と云ふものを自分の心からはなすことは出来ませんと。その聲が鋭く高くありました爲め、人は笑ふたものも怪んだものもあつたようでした、私はこの時眞實に罪惡の塊であると云ふ事を知りました。所がその私は、どうしても我と云ふものを自分の心からはなすことは出来ませんと云ふた口の下に、自分はわるかつた、自分はいかにかしこいものと思ふて居ただらうか、何故佛を疑ふたのであらうかと、こゝに初めて懺悔の心が起つてきました。其時はもう苦しいやら喜しいやらで、涙にかきくれて言葉絶えて、席上に伏して會の終るも立つこと出来ず、私は病人の様でありましたが、又胸の苦しみはすつかりありませんでした。此の時の事は筆にも言葉にも言ひつくすことは出来ません。漸くにして歸路につきました。が、歡喜と慚愧は交々迫り來りて、足は地にあらず、圓繞せ

る万物皆佛の慈光を悦ぶ因となり、又疑念深かりし我は前生
涯を思ひ出して、慚愧の縁となり、又胸中の涸疾は氷の如く
解け、身の各部にこりかたまりてありしか如き心地せし肉塊
一時に柔軟となり、何等の不安なく、これまで思ひ煩ひしす
べての心は死し、地獄や極樂のことも一切の佛の御手の内に
あることとなり、天空は我が心の如く、倏廓廣大の世界に生
活する様になりました。これが慈光によりて新人となりまし
た私の心のまゝであります。

(前巻先生、ほんとに私は不思議でたまりませぬ。昨日午後愚母の
許に歸りませうと思ふて居りましたが、近角先生が色々御話し下さ
れ又讀む本を教えて下さいました嬉さに早く讀み度くて堪まりませ
ぬから學校へ歸りまして、午後から夜にかけて讀まして頂きました
ら、ほんとに解りました。床に就きましたらまだ朝の御佛が居ます
様に思はれまして、實に何とも言へぬ善い心持で眠りに就きました。
いつもは其日の事を思ひながら身も燃えさうな思ひをして悶え泣き
いつしか苦しみ夢に導かれるのでしたのに、夫れを思ひますと今朝
も嬉しくて堪まりませんでした。

今日又私に不愉快の事がありました。いつもなら怒るか、それに
對し心地等からぬ面もちをなすか、又は何故斯る事をなす心的状態
となるや、又如何にせば此を挽め得るや等考ふるが常なりしに、今
日はさる事も無く、あゝほんとに人がかくする程の私は邊問しい人
間だ、だから彌陀は御助け下さるのだと思ひましたら思はずも涙
がこぼれました。又夫れと同時にやがて彼の人も御導きに預るであ
らうと思ひましたら、心中嬉しいのみで一の苦しみも無く悲しみも
ありませんして嬉しくて堪まりませぬ。又愚兄がいつも〳〵の手
紙の内に、彌陀の御冥護により無事だとか、又は御佛の御尊を蒙り

雑報

喇嘛僧雜談

○清國奉天皇廟の住僧、蒙古アルコルチンの王族喇嘛僧
ノルブ氏來朝の事は吾人既に前號の誌上に於て之を紹介し
た。亦氏が來朝の頗末、氏が人品、氏が敬虔なる信念、氏が
興味ある逸話に就ての其幾分は之と同時に讀者諸君に報じて
置いた。併し氏に就て語るべき事は決して前回に於て盡きた
では無い、氏が隨所隨時に於て發せらるゝ一々の言語は皆無
量の味ひを有して居る。殊に吾人信仰を生命とせる者に取つ
ては氏が確信的態度は如何にも慕はしく感ぜらるゝ。吾人は
更に稿を續けて其一部を紹介しやうと思ふ。

○氏は猶ほ佐々木氏の宅に滞在して居らるゝ、而して今少
時は日本に居られるとの事である。氏はいたく日本の地を好
まれて事情が許すなら日本に長く留まり度いと云つて居らる
ゝ相である。處が其理由と謂ふか極めて眞面目なものである。
本國に居れば四圍の外縁が修行の暇を妨げる事が多い、併し
日本に在れば第一言語が不通故外縁の妨害を受くる事が無
し、従て専心修行に就事出来る故であると。以て氏が如何に
信仰の人であるか解かる。

○吾人が最近に於て氏を訪ねた時は、氏は丁度晚餐を終へ

て暮さむことなぞ詰して参ります。其度毎にこの言葉は佛敎の癖
だなと思ひ、雖有くも何ともなきのみか、をかかしてしたが、先程
ふと之を思ひ出しましたも誠に濟まなかつたと思ひました。一時も
早くこの喜びを知らせ、異境の苦みに苦みを重ねし罪を詫言喜んで
頂かうと存じます。(下巻) 芝 某 女

あれ先生、過日の講話はいつもながらの雖有き御はなしにて候ひ
しならむ、私は殘念ながら當校郊遊會のため御拜聴いたすを得ざり
き。
されど當日はかの大吠呷に於て、蒼々たる海に接して陰ながら先
生の御聖敎の下にある心地致し候。くしき巨岩いくつとなく海中に
つき出て、巖をのまんと寄せ來る龍波、狂ふが如く岩に碎けて飛び
散る玉花、あゝ壯、あゝ嚴、あゝ何ぞ死せる水のわざならむ、まこ
とに偉大なる見えざるみ力の存するなるを、知らざりき、我人生同
く見えざる御力の配下に生活しつゝあるを。さるに世の凡ては我
が爲の物の如くに思ひなして、求めて得ざれば怒り、得れば又其上
を欲求す、我實力小なるも人には大に見られむ事を望み、我名の低
きものに列する時は不快を感ず、よき名に列すれば之を以て喜ぶ。
我を責むる事薄く人にあつし、あゝ實に残酷驕慢偽善なりしよ、愛
欲の廣海に沈没し名利の大山に迷惑す、内愚にして外賢内偽にして
外眞とは實に我身の事なりき。斯く迄罪深き身の猶我力にたよりし
事の淺間し、從來名譽心に富みたる我は、今日の如き日には我
らよき處寫生せんものと争うて寫生をなすだにも希ふは。無力なる
吾如何計りの力ありてか此の大なる景色を紙上に現はし得べきと筆
執る心もなく獨り巖頭に腰を下して無量の感に打たれ申候。折から
持參せし本月發行の求道拜讀社説なる惡人救済の德音一言一句ひし
く、と身にしみ渡り毎朝拜讀し致候歎異妙は、其意味増々深長思は
ず感涙に咽び申候。あゝふしぎなる哉佛陀の慈悲九月已來先生の御
聖敎の下にありて斯くなれる我皆佛陀の慈悲なりと深く感謝の念に
堪えず候。うれしさの余り一筆申上候。 本郷 某 女

沐浴を畢へて浴衣のまゝ涼を取つて居らるゝ處であつた。右
手に珠數を取り左手に團扇を持ち、悠々卓に凭つて居られた
其温乎たる風貌は何と無く一見盛夏を忘るゝ様の感じがあ
つた。茲に主として記さんとするは實に此際の氏が談片である
勿論用語は支那語であるが、吾人は幸に佐々木氏の通譯によ
つて之を知る事が出来た。談后佐々木氏の言語學上の談話を
聽いて居る間は氏は嘿然として宛然無心の人の様であつた。
○氏は劈頭吾人に言はれた。佛敎に於ては六道を説いて、
凡て萬事を此の中に包括する。若し人専門に佛道を修行する
時は一切萬事を放擲して專一に之にかゝらねばならぬ、是は
出世間の法である。併し此の外に猶ほ世間に住しつゝ佛道を
研究する法がある、即ち貴君の如きは夫れである。是れよ
り氏は漸次信仰の興味ある談話に移つられた。吾人は已下有
の儘に氏が所談を記述する事とする。

○日本の經文と雖も喇嘛の經文と雖も經文に二ツは無い、
結局は佛道を修行すれば如何なる功德があるかと謂ふ其功德
を書いた者である。處が其功德を目前に見たと言ふ者は一人
も無い、色々經文には並べて有るが其功德を見たとは誰も言
はぬ。斯の理如何と言ふに此の功德の見え無い處が即ち佛敎
の佛敎たる點である。經文を誦して功德が眼前に現はれた事
は釋迦在世の時代に於ては即ち有つた。併し今日では經を讀んで
見るべく次の生を待たねばならぬ。即ち今日では經を讀んで
來世に於て或は大臣或は天子に生れ、夫より順次生を経て段
々とよくなるのである。併し此の世に於ても佛道を修行する

時は其餘徳として人から輕蔑を受け無い、病氣に犯されぬ、亦他より迫害を受けぬなどの事はある。是は信仰の自然の結果である云云。

○釋迦在世の當時は經を讀んで佛を招待する事があつた、而して當時の人は斯くして佛を眼前に見る事が出来た。處が其後になつて人間の福分が滅却し終に其事は出来ぬ様になつた。何んとなれば魔が佛の眞似を爲るやうになつて、佛を招待した積りでも惡魔が現はれて來るやうの事が出来たからである。

○併し釋迦在世の當時でも猶ほ修行力の劣へた事があつた、其時は佛は戒法を授けられた。其處で戒法を授かつた者は衣を脱して法衣に改め髪を剃り髻を去つて八日間位之を保つた。而して之を符號として眞實の行者であるや否やを識別した。さりながら其後に於て、漸次道徳が亂れて、讀經を以て招いても佛を見る能ざるに至つた。遂に黃教の第一祖スンハバール以來は現世に於て佛を見るを思はぬを規則と定むるに至つたのであると。

○氏は修業の法に就いて次の如く語られた。苟も佛道を修業するものは毫髪と雖も美衣美食を思ふてはならぬ、若し之を思ふ時は即ち佛道心が空虚になつた時である。然らば斷食して佛道を修行すべきかと言ふに是れ亦不可である。若し斷食して修道が出来くべくばヤストモリ(龜に似たる四足類にして何物をも食せずして生息するなりと)は第一に成佛すべき筈である、併し此事は決して無き。

○修道の根底は自己の内心を善く持する事である、善事を

○日本は如斯き國で西洋各國と交際すれば、今回の如き強國を對手として戦争もする。自分は日本の天皇陛下は佛の化身にて、大臣は皆羅漢の化身なりと信ずる、とても凡夫の仕業とは考へる事出来ぬ云云。

○氏は如斯く日本の隆盛を以て全く念佛の力なりと信じて居らるゝ、而して昔日西藏に於て全く日本の如き國ありたりとて左の物語をせられた。曰く、西藏のバルバールに國を建て天子か有つて名をソロンスン、ゴンボーと謂つた。バルバールの人民は道理と不道理を説かね野蠻人であつた。夫故天子ソロンスン、ゴンボーは頻りに道理を説いて國民に教をやらしたしが、國民は何としても之を聞か無い、遂に道理と不道理との間に戦争が始まつた。茲に於てソロンスン、ゴンボーは自ら幾百萬の兵を率ひて常に戦陣に出て、死骸の首級を取つては城壁の側に城壁と同じ高さに迄積み上げた。之を觀たるバルバールの蠻人は始めて其恐ろしさに感じ、遂に摺伏して已後不道理を爲ぬ様になつた。

○其後に至つてソロンスン、ゴンボーは自ら佛者と稱し、觀世音菩薩を信仰し始めた、而も猶も王化に服せぬ者あれば時々戦争を起して之を懲らしむ事は毫も始めと異らない。其處で一人の佛弟子があつてソロンスン帝に對し疑團を抱いて「佛者として如斯き大なる殺生を爲しても善きものか、佛を信する者の所爲としては如何にも似つかはしからぬ仕方である」と思つて居つた。

○處が其佛弟子も同じく觀世音を信する者で有つた。觀世音が彼れに告げて曰ふやうには「ソロンスン帝は決して殺生

爲して惡事を爲さぬが修道の根底である。此の根底が定まりて種々の枝葉は分れて來る。

○善事を修する上に於て一直線に正面より進むと側面より行くとの二法がある。正面より進むは即ち佛道にして、測面より行くは即ち神仙道である。仙人と雖も惡事を犯し煩惱を起しては決して成る事は出来ぬ。併し神仙道に於ては求むる所か直ちに現世に於ての靈顯效能に在つて、或は空中に飛び上がり度いなどと思ふ。斯くして自己は全く利己的の他の多くの人を顧み無い、故に根底は美くても終に大道の中に入る事が出来ぬ。佛教に於ては現在に結果を見る事は難いが、佛に成るには一直線の正道である。然らば仙人は佛になる能はぬかと言ふに決して左様で無い、仙人大神通を得れば天界に行く事が出来る。天界に於て縁有つて佛に接すれば必ず成佛するに違ひ無い。併し斯土より一直線に佛になる事は出来ず其間に猶ほ一階が存するのである云云。

○氏は絶對的に日本を信じて居らるゝ、而してそは皆氏が堅固なる信仰の結果である、氏が眼中に映ずるは物は一として信仰的意義を持たぬ物は無い。日本に就ては次の如く言つて居らるゝ。

○現時世界に於て佛教を信奉する國は少く無い、併し其の中にても日本の佛教は最も盛大である。此は如何と言ふに南無阿彌陀佛を稱ふることは何の國にても皆稱へて居る、去りながら他の國に於ては既に國民の福分が盡きて仕舞つて、例へ念佛を稱へても國民の根性が腐つて居る故駄目なのである。

を犯せる事無き者である。何んとなれば今日迄彼れの爲めに殺されたる幾百萬の人間は皆ソロンスン帝の分身である、彼は自分の身より幾百萬の影を作つて之を促へて戦争を爲て見せた計りである。而して眞の惡人共は唯之を目睹して恐れを生じ遂に惡事を止るに至つたのである。汝之を僞なりと思はゞ去つて城壁と高さを等しくせる嚮體を見よ、汝の目に見得べき嚮體は一個も無いであらう。煩惱の目には嚮體と見えるが煩惱無きものには見ぬ無いのである」と。茲に於て佛弟子は大に感動して更らに再問した「如何なる大神通の人であれば斯の如き事を爲し得たのであるか」觀世音即ち答へて曰く「汝驚く勿れ、ソロンスン帝は即ち我が事なり」と。

○其後ソロンスン帝臨終の際に當つて此の佛弟子は立ち合つて拜んだ。處が驚く可きには帝の二人の姪迄が觀音の化身であつた、其證には帝の臨終の際に於て二人共帝の左右の膝より體中へ入つてしまつたと。而してソロンスン帝は入定の儘現に西藏の某寺に祠られてあり、亦此の二人の皇姪は即ち縁面佛白面佛であるとの事である。

○氏は日露戦争を以て實に如斯き意味に解して居らるゝと見える。亦日本人の能く知つて居る關羽の事に就てチャナンチヤホトケ(此の人は天子の師匠なり)の書いたものがあるとして次の話を爲られた。關羽の如き英雄が呉の爲めに殺されて其執念が残つた。而かも其執念が英雄丈けに激げしき結果龍となつて直ちに呉の國を浸さむと欲した。時に一人得道の僧があつて誦經の力で關羽の靈を現世に招かんと試みた。其經は現世の事を現世で果す事を書いた者である。其陀羅尼の結果

關羽は藤朧として姿を現はした。茲に於て僧は關羽に向て何故に吳を攻め殺さむと欲するやを聞いた。關羽答へて曰く「吳は我れに取ては仇である、彼れは吾が生命を奪つた故に我れは亦彼れの生命を奪はむとするなり」と。僧則ち曰く「然らば爾は嘗て人を殺せる事無きや、實に爾の爲めに殺されたる人は世に幾萬と數ふる事が出来ぬ、故に亦爾人の爲めに殺されたるなり、然るに自から人を殺したることを思はずして唯人をのみ恨むの法ありや。」此の時關羽は呆然として大悟し忽ち執念を脱却した。而して直ちに佛とは成り得無かつたが此の僧の弟子となつて、仙人位の資格を得たと。斯の談話の如き亦交戦國の人民は確かに一考の要があると思ふ。

○斯くて氏は已上の談話を結びて次の如く言はれた。其事は日本の經文にも有らうと思ふが、同じく人間と生れて而かも賢愚の別がある。此は何に因つて然るかと言ふに前世に於て事物に能く注意した人は當世に於て賢者と生れ、不注意の人は愚者と生れたのである。身體に就ても矢張り同じ事、醜容、不具、癡疾等皆前世惡業の所現である。然らば我々は何時に於ても善を行じて惡を禁じ、今日已後の結果の豫備をするが肝要であると信ずる。

○今日の日本皇帝陛下の如き確かに佛の化身で居らせらるゝに違ひ無い、今次の戦争の如きも或る目的に對する方便として起されたるものと自分は信ずる。故に自分は日本人の人人が彌々善事を積み、佛敎の福分が日本に據つて保たれる様爲られむ事を切望する。他の國では再び之を見る見込が無い

云々。

○吾人は猶ほ氏より一節の信仰的好話を得た。往昔西藏の或る所に一人の鐵工が住まつて居た。一度び發心して佛道を行ぜんと思ひ立ち種々と身心を苦しめたが悲しい事には性魯鈍にして如何に試みても經を讀む事が出来ぬ。遂に之を或る僧に計つた。然るに僧の言うには汝は何を苦んで如斯く經を讀まむと欲するか、佛道に於ては讀經は必ずしも必要で無い、唯簡易の南無阿彌陀佛を稱すれば足るのである。汝は爾後専ら南無阿彌陀佛を稱して行住坐臥之を忘れぬが可い、念佛の力は讀經の功力に勝つて汝は必ず成果する事が出来る。茲に於て鐵工は非常に喜んで日夜に念佛を口稱した、日々鐵を鍛つ槌の音にも念佛を忘れなかつた。亦五百の羅漢に供すべく五百の鐵鉢を作らむと發心し遂に之をも成就した。此の功力により鐵工はタムヂヤンと謂ふ護法神に生れた。此のタムヂヤン神は現時も西藏に於て信仰せられ、陣傘様のものを頂き鐵槌を手にしたる顔の黒き目の大なる、且つ好みて羊を食する神であるとの事である。而して氏は此の話は我々の方では一文不知の者でも真地目になれば必ず成功するると謂ふ例にひかれて居ると言はれた。

○去月能海寛氏の凶報が傳つた時或人が氏の意見を求めた、此の時の氏の答へは最も簡單で最も明了のものである。曰く其人は決して死ぬて居無い、如斯き真地目なる求法者には護法神があつて必ず之を守護して居る、故に其人は決して殺されるなどの事があるもので無い云云。

○喇嘛僧に關する事は先づ已上に止めて吾人は次に喇嘛僧

を連れ來られたる佐々木氏の談片中より趣味ある二三を録出し、ようと思ふ。佐々木氏は蒙古語と日本語との關係に就て一の新しき意見を抱いて居らるゝ、而かも自ら數回蒙古を踏査して得られたる實地的研究の結果である。

○一體蒙古文字と謂ふものは他の國語と異つて一字々々之を離して書く事の出来ぬ最も面倒な字體である、従て之を活字に作るには非常なる困難を要するやうである。然るに驚くべきは既に二十年前に於て立派にタイプルが翻譯せられ出版せられてあるとの事である。

○佐々木氏の意見に従へば我が國語中には多分の蒙古語が存して居る、今佐々木氏より聞きたる實例の中吾人の記憶に存する二三を摘出すれば次の如きがある。

東屋——日本では東屋の字を當て、「あづまや」と讀む、併し東屋の文字にては何等の意味も無い、この語は即ち蒙古語の轉にて蒙古に於ては現に家の事を「あづまや」といふ。而して其作り方も全く日本の東屋風にて、日本の東屋の四柱に一種の毛織物を巻ける物なりと。

藏——蒙古に於ても物を貯藏する所を現に「くら」と呼ぶ。光——「ひかり」も蒙古語の轉にて現時蒙古人は光を單に「かる」と呼ぶ。

味噌——こは全く同物同音なり。

兄——蒙古に於ては男女共初子を「あに」と言ふ。

親——蒙古に於ても「おや」と言ふ。同じ意味なれど日本に於ては兩親に共用し蒙古に於ては母親にのみ専用す。

已上は雜談中に引かれたる一二例に過ぎぬ、此の外正親と書

して、「おほぎ」と讀むなど全く蒙古語であるとの事である。而して古來色々と解釋に苦める枕詞の如きも蒙古語を以てすれば易々として解する事が出来るやうである。

○蒙古文字の起源はと謂ふに此はイリウのタツタ文字より來たものなやうである。處が此タツタ文字は早くより日本へ傳つて居て誰も知ら無い、眞言宗等より傳へられたのも澤山あるが眞言に於ては例の秘密を貴ぶ結果全く無意識的に傳へて居るやうである、即ち陀羅尼は是れであるとの事である。

○是に就て佐々木氏の話された所が中々面白い、叡山に於ては三角形を頻りに貴き物として居る、此の三角形は彼地の「イ」の字より來たものである。「イ」の字は火の燃ゆる形で、大自在と謂ふ意味を有して居る。火の燃ゆる形を上へ一個下に二個書けば寶形となる、此の寶形を「マニ」と謂ふ。此「マニ」は佛敎に限らず神道回々敎に於ても之を貴んで、即ち隨意大自在、今日の自由と謂ふ意味である。

○即ち此の「イ」の字下に「モ」と「ア」「ニ」の三字を附すれば「イモアニ」となる、「イモアニ」は「イマーニ」で回々敎の呪文の事である。之を日本に持ち來れば「イモ」(妹)「アニ」(兄)となる、即ち陰陽の意味で回々呪文の陰陽大自在と同意味である。

○又之を支那に觀るに「イモアニ」の「イ」を畧して約言すれば即ち「マニ」となる。「マニ」は前にも言へる如く大自在の意味で、之を支那に譯すれば如意と言ふ。彼の佛家の用具たる如意は即ち此の火の燃ゆる形をうつしたものである。又日本に在る「熨」も其形で轉じて祝福の意味に用ゐて居る。現今支

那に於ては猶ほ如意一對を婚禮の席に携ふる習慣が存して居る。

○更に之を諸家の紋所より觀察すれば北條氏の三鱗の紋である。此は天山に「ポクド」と稱する三層の火山がある、此の「ポクド」が「ボクジョ」となり遂に「ホージョウ」と變じたものであらう。俗には江の島の龍神より貰つたなど、謂つて居る。古代石器時代の遺物にも往々三鱗の紋を見る事がある。

○亦十字形に就ては佐々木家の四つ目の紋である。(氏は佐々木氏也) 四つ目の紋は始めは輪廓が無くて内の十字形のみで有つた。「サ、キ」は蒙古語「チャサツク」の訛言で「チャサツク」は丘陵の意味である。丘陵は常に天子の墳墓に用ゐられ、從て司吏が設けられ遂に役名となつた。日本へ來ては「ミサ、キ」(御陵)とある。近江に佐々木山と謂ふがあり其所より佐々木氏は起つた。此の佐々木山は神代の神を祠つた山で其の神の標章が十字形である。即ち日本に在つても神祇には十字形が存して居る。之を圓内に書けば轡の紋となる。

○佛敎に於ては即ち卍である。基敎の十字架は基督の磔罪已後など謂も疾くに其已前より存して居る。

○法隆寺の佛像の袈裟には四ツ目の紋が着いて在り、古代帝王の冠、天神の壘の縁にも同じく之を用ゐて居る、亦伊勢の二見浦の注連は轡形に懸ける規定である。畢竟卍字、十字、四目紋共に同じ根から來て居る。

○轉じて之を支那に見るに「神」の字は之を分ては「示」と「申」となる。「申」は即ち圓上に十字を書いたものである。其他「福」の字「雷」の字の如く神的文字は多く十字から成立つて居る。

嘆 咏

小園秋來

左 千 夫

十日に足らぬ旅なりしを、秋風隈なき小園のさまや、一夜二夜と吹き荒みけむ、嵐のあとを掃はれば、生々しき落葉のみだれ、草むし石荒れて怪しき虫ども打這へるも、あはれいと深きに、重根の楡扇やそこ並の群野菊など、もの寂しちに咲き出でたる、今しも主人を迎へて、とりに待ちわびし思ひを訴ふるにや、なか／＼に看過ぐし難き趣になむ、新に室を掃ひ空たきゆかしく湯を呼びて茶を立てつゝ聊か懷を述べ。

うなわらが植しほほづきもとつ實は赤らみにたり
秋のしるしに

秋立つと思ふばかりを吾が宿の垣の野菊は早咲き
にけり

手弱女の心の色をにほふらむ野菊はもとな花咲き
にけり

る。

○次に之を形にて顯はせば上下を指せる像となる。之が朝鮮に於ては門の神で、門前左右に上下を指せる二個の立像がある。印度に在つては即ち太子佛である。太子佛は天上天下唯我獨尊に因みて作つたと謂ふも此形は遙か釋迦已前より存して居る。亦日本に來りては彼の鳥居である、鳥居の形は即ち十字を二個並記したものである。要するに如斯く原始時代の宗敎思想に於ては各國共十字を以て神を標章する事に歸一して居る。

○己上は氏の所談の一部である。説の如何は知らず唯吾人が尠からず趣味を感じたれば之を紹介したる次第である。且滅裂なる記憶に因た事故意外の誤謬が存するかも知れぬ。斯くして氏は世界人種の歸一を認め其歸着點は即ち中央亞細亞のバミール高原ならんとの意見を詳かに歴史的に話された。吾人は次に國史上の一説を記して稿を結ぶ事とする。

○支那西藏に於ては佛道修行の一派として凡ての宗派が繪を書き像を刻むをうである。其の彫刻の方法は名人の摸型の中へ土を埋めて之を作つたもので、我が國の弘法傳敎になれば土の代りに線香の灰を用ゐる由である。修行の爲に作るのであるが段々功が積み徳が備はる頃には自然と腕前も上達する。之に就て我が國歴史家の中に聖德太子が「マルデ」の油を以て四天王の像を作り之を額上に頂いて戦争に出られたと謂ふ記事に關し戦争中さる余裕の存すべき理なしとて之を否定し、亦古來の高僧中繪畫彫刻に巧みなる人の事蹟を疑ふ説もあるそうだが、此の邊より觀察すれば強ち否定し去る事は出来ぬとの事である。併し無論之が爲めに必しも作つたと断定する譯にはゆかぬ、唯理屈が無いとの説文だけは破る事が出来るのである。(己上)

繪扇の丹つらふ色にくらぶれば野菊の花はやさし
かりけり

むらさきのか弱に見ゆる野菊には猛き男の子も心
なぐらし

生死もわかず年經し猛夫等も秋風立つに家思ふら
んか

まつ人も待たるゝ人も限りなき思ひ忍ばむ此秋風
に

海のべの夕べ松風起れどもとにきくべき人もあらなくに (甲之)
天地はかにもかくにもありとへど心なまばらしくあらん
風起り暮るゝこの夜のまこしへに明けずありなんこの現世に
雨の日の夕べとなれば我が胸のはかなき思ひいやもえにもゆ
人の世の悲しきためし語りつき言ひつき雨の夜はふけにけり
人こそま正しと知れど我が身を悪しし知れどされどかなしき

八 風

十日ふり二十日とふれるなが雨に甘藷イモの蔓マさす一日もあらず

長雨に移し植うべき時をなみ胡瓜の花の苗床にさく

雨の中に巢作り初めし燕の雨はれずして巢を立ちにけり

長雨の晴れたる今日を里人はこゝにかしこに道作りせり

長雨の晴れて肥置く里びとの白き管笠青田にうごく

長雨のはれて御池を來て見れば青草浸す岸のさざ波

山ごとの朝霧はるゝ川下を草刈り少女飛びわたる見ゆ

枝折りて蜘蛛の巢拂ふ深山路に花もあらずに鶯鳴くも

谷川の清き流にわり籠洗ふ少女の手もと小魚むれ居り

稻葉わたる夕への風は紫の伊吹の山ゆたゝに吹くらし

紫の伊吹のやまゆ夕かせのそゝと吹き入る妻戸すずしも

風そよぐ青田にひとのかげ暮れて夕映うすき伊吹遠山

夕映の雲の紅きゆるなべに伊吹の山はいや遠のさぬ

浴みして青田の畔に涼み居れば稻葉のなみの音のさやく

雲とぞす青垣山の末はれて伊吹山見ゆ雨霽るらしも

山かけにたゝふる淵の面すみて秋草の花たゝにうつれり

谷川のよとめる岸の紅のいちごたわゝに水に垂れたり

悼 亡 弟

也

夏山のつゝぢの花を、糸にさし、岩つゝぢ、

野つゝぢ、白玉つゝぢ、紅つゝぢ、糸にさし、

糸にさし、さし列ね、さし列ね、

ひるねする彌作爺の、新簀子、香ぐわしき簀

子の上に、汗ながし、息吹鳴らして、ひる寝

する、彌作爺の、彌作爺の、

ぬば玉の、夜光る禿の、禿の光る頭に捲きつ

けて、七卷八卷、捲きつけて、捲きつけて、

彌作なぶりし、弟は今亡し、

花さかばやがて手折りてみ佛にさゝけます祖父ここに老いましぬ

初なりの胡瓜さゝげてみ佛にぬかづかす人見れば尊し

雨すぎし葡萄の露をなつかしみ端居しせれば風露を拂ふ

谷川にせまりて高さ岩角を覆ふ葡萄實いまだあを

漁りつゝ小川のぼりて谷に入れば梢葡萄に鳥むれさわぐ

甲斐の國の葡萄さはなる秋はさぬ實にて食ふべし酒作るべし

吹き上くる風をすゞしみ岩に立てば真下の淵に小龜浮き來も

遊 行 日 記

毎年七八二ヶ月は地方有縁の地に趣きて傳道する例なるも、今年には東京に定まれる話する約束もあれば、七月中は求道學舎の講話も爲し、不忍池の講習會をも濟まし、八月だけ地方に赴くこととなりぬ、伴ふ所は靴一個と聖教數冊行雲流水何のはからひなくして自然に暑を忘れ、日夜求道の方々に接するに忙はしくして妄念に時間を與へざるは全く御佛の御手回はしなるべし、特に到る處信仰を同うする同朋諸君の心より溢れたる清らかなる款待と一見舊知己の如く我が旅情を慰むる溪聲山色と、何れか佛恩の賜ならざるべき、さればありのまゝ、思ふがまゝを記して少しも潤色を加へず以て時報に代ふ、是亦光明海中の一瀾なりと云ふも無慚無愧の極みなり

○七月三十一日。

常 觀 識

米澤の夏季講習會に出立すべき日なり、前日に學舎の人々と暇を告げ前夜に十分用意届きたれば、朝四時起きて面を盥ひ、口を嗽き、旅装を整ふるうちに、車も來りたれば、簡單に佛前に禮拜して、家内中にさらばとて旅立す、雨歇みて氣清らかなり、上野停車場につきて直ちに三等列車に入る、廣

々として自由なり、五時發車す、此夏は殊に親鸞聖人の著書を改めて拜讀せんと志す、從來は「教行信證」の御延書のみを拜したりしが、御眞筆を拜し奉る時の用意にとて、前日澁谷本の小本を購ひ來りて携帶す、車窓を開けて、明けゆく東の空に連れる廣々したる緑田に向ひつゝ、毎朝の勤行の心地して「教行信證」をよむ、暫くして携ふるパンと鐘詰を開きて朝餉す、菓物まで頂きて心の中に感謝を捧げし時、傍の人親切に新聞を貸して下さる、我亦携ふる「求道」を御覽に入れぬ、荒川を過ぐる時十七年前高等學校にありし時冬休暇に本多辰次郎君と共に親鸞聖人の靈蹟を巡拜せんとて脚絆がけにて朝早く東京を旅立し、氷を破りて此川を舟にて渡りしことなどフ、想ひ出す、「教行信證」も讀み飽きて、「愚禿鈔」を讀み、今更の如く感ずること深し、今まで氣づかざりしことの、氣付きしことあり、又經文中にて殊にありがたく感じつゝありし文の既に業に引用し給へるを發見して、仰ぎ驚くと共に、亦何となく満足に堪へぬ心地するは何故ぞ、信仰の書は默契神會の所に味あり、事々しく之れを口にするとときは角だちてわろし、之を傳へて何々の意味なりなど言ふに至りては忽ち生命の蟬脱するを見る、「愚禿鈔」の如き簡潔なる文字に至りて此感尤も深し、昔華嚴風潭は此書を一見して、ア、コレは親鸞のどうづけ(備忘録)なりと言ひしとかや、既に稱して愚禿鈔といふ、洵に鳳潭の言ふ所の如けん、而して此どうづけ而かも聖人の晩年の筆に成りしどうづけの存すること吾人聖人の信仰を味ひ奉るもの、命なり。

何處の停車場にてありしか、道者の白き服したる人々澤山

どや／＼乗り來る、若者皆質撲にて互に膝を交へ、究屈を忍びて相語ふさま傍のみる目もうれし、次の停車場より又同様の服装したる人々乗り來る、其中の一人村の長めきたるが口鬚など生やしけるが、一向道者めかぬ言語などつかひ、去年の事など思へば、今年是人少し、何人まては此列車に乘れる筈なり、彼の靴を上げよなど、本來圭角なき所に、特更に角をつくりて得意氣なり、此様な服して究屈なりなど自分をつぶやきて、携ふる平服と着換へなし、「求道」を一瞥してコハ生れてから間がありませぬな、など話かけられ、我々は二荒山別格官幣大社大祭の爲め、山開きにつき、中禪寺湖より奥まで上るものなり、昨年は三日間に何千人登山しける今年は無代價にて出征軍人の爲めに祈禱あり、様々と無間自説を傍聽せしめられ、遂に若者に下品な話などして、質朴太古の民かと思はるゝ道者の品位を落しぬ、宇都宮にて此一群乗換して後はあまり廣々したる儘に横になるや否や華胥の國に遊びぬ、黒磯につきけるとき小雨しぐる、フト一昨年秋常陸の鹿島に參れるとき宿を同うしたる田舎の一老人を思ひ出しぬ、此人は奈須野の中に二三軒なりし所を開拓して、今日の黒磯を作り出し、自己の土地と貯蓄とを寄附して一人して黒磯神社を作りたる神々しき人にてありき、折あらば尋ねべしと約しけるが今は如何に暮したまふらん。

「求道」を讀みて、自分ながらありがたしと感じて思ひつきのまゝ、東京へ五十部送れと電報し、又黒磯にて米澤へ五時つくと電報しぬ、車掌に托して後、發車前に時間表を一瞥したるに見誤りて三時着と思ひぬ、車掌にいそぎ訂正を求めぬ、

車掌快く諾ひて車に降り來れるとき、又三時は誤りにて矢張五時着の正しきことを發見しぬ、車掌も大笑して又快く訂正しくれぬ、僅かに一分足らぬ間に、是が非となり、又非が是となる、是非しらぬ邪正もわからぬこの身なり、唯是につけても、非につけても飽まで同情を以て世話してくる、車掌うれし、車中の事は車掌に任ずべし、人生の事は御佛に任ずべし。

或停車場より乘れる人、物珍らしげに何でも尋ねる人なり、又心安く請はるまゝに皆與へぬ、土瓶、茶碗、新聞さては空罐まで残れるを隈なく嘗めて風呂敷に包みぬ、さては世には殊勝なる心掛の人もあるものかな、と思ひつゝある中に別に見るともなきに、風呂敷包の中に壹圓、三圓、五圓とさゞやかなる額の借用證の小供らしき手、女らしき手、無學らしき手にて覺束なげに小さな紙に認めあるを澤山に携ふるを見て、ア、成程かゝる職業の人にてありけるよ、殊勝と思ひし心は一變して、一瞬間に借用主の境遇眼前に往來して、最後に其人の顔を眺めしに、さげしむよりも寧ろ憐むべく思ひぬ。

福島にて瀛車を乗り換へ、便所へ往かんと出て行くに、祥雲確悟君向ふより來たまひぬ、互に顔見合はせて是は／＼と默禮す、君は改札口の所に暫く立留りたまひ、我は便所にゆく暇なしと車掌に制せられて、直ちに自分の列車に入り、君に入りたまへ、と言へば君頗る不審の面持にて、「君は二等なるべしと思ひて、自分は三等にてありけるを、今わざ／＼買ひかへたるなり」と、偕は大笑となり、然らば此度は我御つき

合せんとて、二人とも二等に入りぬ、其由車掌に告ぐると同時に發車しぬ、幸に自由に便所にゆくを得て是亦君の御蔭なりとて笑ひぬ、借何れへ行き給ふやと尋ねれば、山形の講習會にゆく序でに、我も同じく米澤講習會三日間講話を依頼されたるなり、實は上野停車場にて心待ちに待ちつゝありしが見付からざりしなり」と、我も東京已來獨想につかれきつたる時身も心も同道の友を得たるなれば、何やらかやら、色々の話、夫から夫へと、前後を争ふて出て來ること、人の木戸口を出づるが如し、去年夏信州より歸路、輕井澤より君と同道したる事など想ひ出し、趣味湧くが如く、話は益々眞面目に入り、トンネルを通る毎に窓外の景色益々清らかに、谷川の流れと共に氣も澄み渡るが如く、談話も内腑を穿ち、心奥に達するほど人間の情を離れて、靈泉湧き、至誠來る、此數十分間は予にとりて少からず偉大なる感想を興へられぬ、無我無中の間に瀛車は米澤につく。

停車場には長沼徳水君、關口庵主、大峽君、馬場君、井上君等に迎へられ、挨拶をする、歡晤する、祥雲君を紹介する、靴を持つ、名刺を貰ふ、車に乗る、忽ち走り出す、一昨年知り合ひの清涼なる山水に迎へられ、長い橋を渡り、遂に予か宿に充てられたる舊知己なる長沼徳水君の寺につきてぬ、清められたる座敷に通じ、徳水君と久瀾を叙した、徳水君は予か米澤に來りしことを痛く喜ばれぬ、母堂夫人、弟君、弟夫人、子供衆に挨拶して、入浴して心を込めて用意して下さつた晚餐を頂戴し、信仰談を爲して、夜深に至り、安らかに眠る。

●八月一日

講習會開會の日なり、此會に予を出席せしむべく經に緯に織りなせる佛縁を描かんかな、抑々此度の講習會出席の因縁となれるは帝國大學の大峽秀榮君なり、同君は去年の夏已後學舎に入りたまひて、去年の暮信仰の勃興したる時、之か動機となりて痛く、求道の志を起したまひ、現今兩忘庵にありて坐禪修行に餘念なし、而して恰も兩忘庵主と予と祥雲君と出席することとなりぬ、殊に今年の講習會には女子部の方信仰を求むる熱心深かりき、送り來たりし「求道」過半は此人々の手に落ちぬ、是常に學舎に聴講したまへる女子高等師範の馬場春子氏が源となれるが如し、又前記の長沼徳水君は二十一年前予か京都教校に學ひし時の同窓にして、現時米澤分監の教師として盡力せられ、平素深く「求道」を愛讀せらるゝのを得たりとは、同君が眞摯なる告白なりけり、其他關口庵主は一昨年相知る所、中學の教員并に生徒諸氏は「求道」によりて未見の知己、嗚呼一として佛縁の然らしめ給はざるはなし。

昨夜來雨劇しく、市街所々に洪水氾濫、所々の橋落ちんとす、午前公開演説の筈なりしも是亦雨の爲めに流れ了りぬ、講師委員相伴ひて上杉神社に詣す、越後より會津に移り、又會津より米澤に移る、而して猶舊臣を養ふ、此に於てや何れも微服にして内職の必要起る、米澤織之か爲めに發明せらるゝと、午後講習會開會す、關口庵主開會の趣意を辨じ、祥雲文學士「佛教倫理」なる題下に詳細に哲學と宗教との關係を叙せ

らる、予は「絶對信仰論」といへる題下に又毎日一項づ、辨ずること、せり、本日は實験の信仰を説く、釋宗活師は證道歌の提唱をなす、今年は一昨年若くは昨年の如く準備整はざりしゆゑ、人數少しと雖、少數の人は皆熱心なる人のみなり。

●二日

早朝嘗て米澤監獄中に在りし人來訪せらる、此人初め頻に道を求めしも遂に得られず、長沼君の勸に従ひ、「求道」を求めしに恰も、父の示寂によりて教へられたる眞實證の靈境」の文を讀み、忽ち即座に信仰に入られしと云ふ、爾來毎月之によりて修養し給ひしといふ、予ます、佛陀の御はからひの極なきに仰嘆するあるのみ、十一時より長沼君の需に應じ、分監に赴き一席の講話を爲す、先つ分監長の案内によりて工場を巡回す、米澤織、打紐等主なる工業なり、分房を見る、一時に諸房を開くの装置あり、非常用のためなり、最後に教誨堂に囚人を集め、分監長已下看守皆列席す、一時間に垂んとする教誨を試む、予も佛恩を喜び、囚人亦感泣す、蓋し是滯米中、最もありがたき法縁なりき、午後亦講習會に於て「絶對他力」を説く、聽衆益々眞面目となる、特に女子求道の氣運切實なり。

●三日

午前演説會を開く、祥雲君は「宗教の活動」につき詳かに辨せられ、予は「日本精神的文明の過去及び將來」につき辨し、釋君は禪宗大意を述べらる、引續きて有志者茶話會ありて、圍鑿中食を共にし、午後講話する常の如し、予は「信樂開發」につきて述ぶ、聽衆は益々眞面目なり、祥雲君の講義は終結を

告げ、明日山形に向ふ、前夜君予を訪はる、今夜予君を訪ふ、信仰談益々密に入り、夜深不可思議の感を抱きて歸る。

●四日

予は毎朝本堂祖影前に於て教行信證を拜讀し、化身土巻を除くの外は徹看せり、而して殊に信卷下より證卷に至る絶對信仰につきて今更の如く少からぬ味を覺えたり、今日の講話は「横超涅槃」につきて辨ず、此日女子三人求道の爲に來たまひぬ、苦悶去りがたく、安慰未だ生ぜず、百方佛陀の大悲を説くも未だ廓然大悟する能はず、聖人が歌なる

病し子を殘して歸る旅の空

心は跡に残りこそすれ

●五日

予宿する淨圓寺は上杉家に隨ひて高田淨興寺が米澤まで移轉し來りたるものなり、予の如き聖人の靈蹟を訪はんとするものには一入の味なくんばあらず、予は今月末高田淨興寺に參詣の志ありしゆゑ、偶然にも此寺に宿りたるは奇縁たらざるはあらず、聖人の眞筆十字名號を拜見す、九號は高田にありといふ、今月は講話最後の日に於て説者聽者眞面目の極に達しぬ、光明中の生活」と題して、自然法爾章と現生十種益とを味ひて人生も世界も佛力普遍なるを仰ぎ、とても言も心も盡きはてたれば教行信證の三序を拜讀したが一文一句身に沁みてありがたく、中には歔歔涕泣してさき居られし方もありし、時間が來たから暇を告げて車にて停車場に向ひしが、トルストイの所謂同一の道なれと信前と信後と往復其趣を異

にするが如く、同一の米澤なれど前は有漏の山色、今は無漏の清淨身、橋を渡るときは全く別の世界と思ひぬ、漸く停車場を望みて前の記憶の再現したるとき忽然として下界の人となりぬ、大峽君長沼弟君に送られて發車す、來し時は車中の談話に身入りしが、今は飽まで夏木鬱窓たる緑、溪流泓冽たる藍、さながら畫の如く恍としてエルベを添ふてザクセンの深林を旅行せし昔を回想せしむ、夕方福島に着して停車場前の一蕪亭に宿りぬ。

雜誌が後れるのが氣掛りゆゑ、今月は是非くり上げんと志し、四日の夜中に起きて執筆し初めた「信樂開發論」をば宿屋の二階にて繼續し、「信卷」總序を拜讀して大に感動せり、一の文字が如何にも親鸞聖人の眞面目が發揮されて十二時發車前に其過半を書き終る。

○六日

零時頃福島より乗車す、東京河開きの爲め昨夜來非常の人出たりといふ、三等には空席なければ二等に移る、嘗て必ず三等の事と考へたることもあれど、結局今では柱に膠して鼓するをやめて、臨機應變の事とす、二等の後三等に乗れば其苦勞を知り三等に乗りて後二等に乗れば其勿體なきを悟る、夢安らかに横臥して眠る、朝早く寤め、小山にて朝餉を買ひ讀み残したる化身土卷を拜讀し畢りたる時恰も上野に着す、朝九時頃なり、直ちに車を飛ばして家に歸る、和氣團々たり。

旅装を解き、學舎の人々を訪ひ回はり、無事なる顔を見て喜ぶ、萩野兄を訪ひ米澤の話して歸り、家庭團樂して晝飯を喫す、抑々米澤をかく急ぎ歸りたるは本日必要なる二要件の

總序は始め半枚を過ぎて後は紙散佚する所あり、頗る惜むべし、教卷も時々失へる個所あり、行卷以後は皆完全なり、用紙は一定せず、種々の紙を用るたり、鳥の子あり又繪旨などに用るし青色の紙もあり、又現行の本には本文の細注とされる反切字訓の如きは紙面の冠頭に横書になれり、最も貴く感じたるは時々緊要なる文字の右側に棒を引けること、又一層肝要なる所には左右兩側に棒をひけることあり、又大体に大切とも謂つべき個所あるときは冠頭に矢形の記號を記して備忘注意の爲にせられたるもの、如し、此側に棒を引くことは恰も吾人が文章を草したりて、朱を以て點を附せるか如きか、何れにしても聖人が着眼點を知るを得て其味無窮なり行卷にては光明名號内外因縁和合の所の如きは頻りに棒を引けるを見る、是に由て之を觀るに聖人が格別に心を用ゐたまひしを知る、其他行の一念、信の一念の如き、言他力者如來本願力也の文、絶對不二之教同機并に弘誓一乘海者乃至不可說不可稱不可思議至徳の文字、三世十方一切如來出生故等すべて吾人が頭腦に深く感じたる所に側棒、記號等を見出すこと何とも言ふべからざる感想を以て満たさる。

かく校合しつゝある間に萩野兄は後序を校合し給はりたれば二人して引續き信卷を非常なる速力にて校合して信樂釋の華嚴經の文字、信爲道元功德母と云ふに至りし時黄昏文字を辨せざるに至る、残念ながら他日に譲ることし、校合を中止せり、其他信卷表紙裏に阿闍世苦悶の涅槃經中の悉知義の一節を丁寧に出したまへり、之を以て見るに彼涅槃經の文字は餘程聖人の注意を惹きしは疑なきもの、如し、化身土上卷

存すれば也、一は恰も日曜日に當れるを以て一度たりとも巢鴨監獄にゆきて囚人を慰籍せんが爲めにして一は一年一度虫干の爲めに觀覽を許さる、阪東報恩寺所藏の親鸞聖人眞筆の教行信證草稿を拜觀せんが爲めなり。

食後巢鴨監獄にゆきて二席の講話を畢りたる後、車にて淺草報恩寺に到る、久しき己前より其志ありて米澤に行く前に之を依頼し置きたりき、明七日一般公衆に拜觀を許す爲めに淺草本願寺別院の寶庫より今日迎え來りたるを特別に厚意を以て予にのみ示さる、光榮を得たり、院主に導かれて奥書院に至る、恭しく見臺の上に開かれたるは一日千秋の思を爲して渴仰しつゝありし親鸞聖人の眞筆、一瞥の下に眼に映し來る開かれたる箇所は總序、信卷別序、後序の文なり、遙かに拜するに最も著しく感じたるは信卷別序の書き方、一字々々は方一寸もあらんと思はるゝ大さ、夫以獲得信樂の文字の如き聖人の眞面目は躍如として筆端にあらはれ、筆力猷勁とも云ひつべきか、全く蕪絆を脱して、無碍自在の境界が現前するを覺ゆ、然未代道俗近世宗師沈自性唯心云云の文字の如きに至りては聖人獨得の特色發揮せられて古今に卓立せる自信力は歴々として見つべし、偶然昨夜福島旅亭に於ける感想は恰も今日此靈筆に接するを豫言せられたるの感なくんばあらず一時は茫然として夢ならざるかを疑ふ、前約ありて萩野兄も來り訪ふ、乃ち院主に請ひて一冊づゝ卓上に開きて始より丁寧に拜見す、予は米澤已來熟讀下調せし澁谷本と對照するに相違の點頗る少きを見る、トニカク予は出來得るかぎり校合せんとて始より一一拜讀し初めぬ、

如きは彼記號多かりしが如く覺ゆ、すべての點に於て予は大なる満足を得たり、茲に謹みて院主阪東大宣師に滿身の感謝を捧げ、聖人の遺墨に對して無上の敬意を表し奉る、年を涉り日を涉り、其教誨を蒙るの人千萬なりと雖、親と云ひ疎と云ひ、此見寫を得るの徒甚だ以て難しと宣ひしもの、吾人は此無上甚深の寶典の御眞筆に對する感想たらずんばあらず、實に悲喜の涙に堪へざるもの、聊か喜を同信同朋に頌たんが爲めに記すこと此の如し、

○七日

社説を脱稿せんとして朝來机に向ふ、午後に至りて華名君七年目にて來訪したまひ、互に懷舊の情禁じ難く、欣慕の念益々交る、君心を啓きて將來の方針を述し、我亦思ふが儘を披瀝して卑見を叙す、談話數刻、君予が時間の乏しきを察して歸らる、送りて門に到る、又筆を採りて勿々の裡脱稿したんぬ、旅装を整へ、既に用意成れる膳羞を數分の間に喫了し喜色滿面家を出て、車馳すること章駄天の如く、新橋停車場に着せしときは急行列車發車前四分なりき、暑中休暇中、求道の目的を以て岡山高等學校卒業後東上して學舎に寓せらるゝ城君、予を送らんがため既にプラットホームに在り、予倉皇として車室に内り、車窓に凭りて一揖したるの時、列車は予を京都市青年聯合會の夏期講習會に運ぶべく運動し始めぬ。

* * * * *

望月信亨先生閣 小野玄妙君著

佛敎年代考

●六月廿日發行
●菊版三百餘頁
●定價六拾錢
●郵稅拾錢

年代の換算は、史的研究所の根本基礎なり、然るに今佛敎歴史の研究にありては、全然之を缺如せり。宜なる哉、其説明の曖昧不確、寸毫も信ずるに足るものなきや。今此著は、か、批判的考察を試みたるもの、引證の該博、論辯の犀利例せば、四阿含經を攻駁して、寧其非佛敎なるべきを絶叫し、馬鳴を説明してそが起信論作者に非ざるを斷接せる等、如何に其問題を提供することの嶄新に、而も之を解説することの痛快なるかを見よ。思ふに如斯研究たる、是恐らく最近の學者と雖多くは未だ敢てせざる所、其結論の如きも、愈々出て、愈々精緻なるものあり、一見以て著者の勞苦の如何に大なりしかを察すべく、少くも佛敎史の年代學的攻究に於ける一紀元を畫するの著として、之を推薦するに吝ならざる可し。

編輯主任 蛭川龍夫
●佛敎全書 第一編 起信哲學 ●紙數三百頁●定價同上
●一月發行●再版出來

編輯主任 小野藤太
●佛敎全書 第二編 眞言哲學 ●紙數百五十頁●定價同上
●上製八十錢●再版出來

編輯主任 小野藤太
●佛敎全書 第四編 佛敎倫理學 近 刊

阿部全鼎 著述
●地學雜誌 佛敎地理 近 刊

芝田學士の淨土哲學、金澤學士の支那佛敎史、百目木氏の日本佛敎史梅澤氏の佛敎文學等順次發行
發行所 東京市淺草區榮 久町百三十番地 宗教研究會

近角常觀 著

懺悔錄

袖珍百五十頁
附録「歎異鈔」
定價金貳拾錢
郵稅貳錢

本書は近時求道者が信仰上の金科玉條たる「歎異鈔」の眞髓たる罪惡救済の意義を闡明せむが爲めに作りたるもの也。而して著者は先づ自己が經驗に筆を起して、半年已上胸中に於て寸時も止むことなかりし煩悶を叙し、最後に佛陀攝取の慈光に接したる實感を披瀝し、又著者の經驗を聞き獄中大安慰を得たる事實を詳説す。是れ懺悔錄の名ある所以にして眞摯一點の修飾を施さざる所、讀者を導きて共に佛陀の慈懷に眠るの想あらしむ。特に韋提希夫人の求哀懺悔、阿闍世王の苦悶救済を描くに至りては二千年前王舍城に於ける悲劇を現在に見るが如くならしめ、現代の哲學理論中に於ける信仰問題は、即ち是れ印度古代の六派哲學中に於ける佛陀慈愛の實驗と全く同一なるを説明し、全篇親鸞聖人の信仰と人生觀とを寫し去り寫し來りて餘蘊なからしむ。冀くば眞摯道を求むるの一讀あらむことを。

發行所 東京市本郷區春木町 二丁目二十一番地 森江分店
賣捌所 東京市本郷區 森川町一番地 求道發行所

文學士 常盤大定編纂

佛陀之聖訓

訂正 四版

定價 上製 金卅五錢 並製 金廿三錢 郵稅四錢

拾部已上ハ特別減價一割引ノ上郵稅ヲ負擔ス
●以て佛敎の大意を知るべし。
●以て講話敎誨の講本に供ふべし。
●以て修養の箴、家庭の規とすべし。

發行所 東京市小石川區 白山前三十二番地 無我山房
取次所 東京市本郷區 森川町一番地 求道發行所

特別豫約廣告

新體 詩集 靈華集 定價 三十錢 郵稅 二錢

右は佛靈燃ゆるの詩集、句々血あり、涙あり、好評噴々として世既に定見あるの書、而して永久不滅の華集とす、今や殘本百餘部を有すのみなり、此際「求道」の讀者に特別豫約價一部金十八錢郵稅不要にて願つ有志の士(再版せず)發行所 東京市神田區美土 代三丁目一番地 三光堂

規定

- 一、本誌は毎月一回(一日)發行とす
- 一、本誌は一切前金にあらざれば御注文に應ぜず
- 一、本誌代金は必ず小爲替にて遞送の事
- 一、但郵券代用の節は五厘切手にて一割増の事
- 一、本誌の購讀者は住所姓名を詳細に楷書にて申送らるべし、轉居の節は新舊兩所の宿所通知する事
- 一、回答を要せらる、方は相當の返信料を添ふべき事
- 一、本誌定價左の如し

一部	一ヶ月	六ヶ月	一年	郵稅一冊
金拾錢	金拾錢	金六拾錢	金壹圓拾錢	に付五厘

●廣告料五號活字一行(二十七語)一回金拾錢

一、爲替振込局は「本郷森川町郵便貯金爲替取扱所」宛の事
一、爲替受取人名宛は「東京本郷森川町一番地求道發行所」とせらるべし

明治三十八年七月三十日印刷
明治三十八年八月一日發行

發行兼編輯人 百目木智健
印刷人 白土幸力
發行所 東京市本郷區森川町一番地 求道發行所
(電話下谷二四三二)

大賣捌所 東京市神田區神保町 東京 堂
同 本郷四丁目 文 明 堂

前號要目

求道

- ◎不可思議論
- ◎門戸と堂奥
- ◎純他力主義
- ◎明來關去
- ◎一切無礙
- ◎告白一
- ◎告白二
- ◎告白三

講話

實験

近角常觀
近角常觀
塚本大愚
岡田菊僊
求道生

雜錄

- ◎法句經の二十節
- ◎喇嘛僧談
- ◎行々子
- ◎机上の花
- ◎龜井戸の藤
- ◎眞言宗綱要
- ◎時代宗教
- ◎印度佛教史綱
- ◎佛敎年代考
- ◎靈華集
- ◎高師佛敎會茶話會
- ◎佛敎青年夏期講習會
- ◎夏期修養の好時機
- ◎求道會講話
- ◎講話題等

常盤大定
左千夫
甲之
同

求道第二卷第七號 明治三十一年十二月廿六日第三種郵便物認可 明治三十八年八月一日發行(毎月一回一日發行)